鳴原記

リ 5
2926

伊5
2-926

伊勢
2926

予生所いへだ。雑波ゝとよりゝあき賊の
境界を奥家をこうきたい生ふ。をきう
初ゝく。身をうき初の梶をゝく。何
こゝの海へと生ゝぐよのへば。極楽ゝ行ものう
生ゝ初ゝ。こゝ初ゝを寛永庚辰
秋の宮中をもや過ゝく。す来の生のう
ゝ無共清潔はゝり成たよりとゝ。沢
嫌の邊ふ道高ゝく。野りせの宮をゝ
むまび極ゝべのゝれゝくゝ月
さゝりがちゝ生ゝ。つまゝゝ

あまりふ。こゝ〳〵ゆゑなかるべきをも
う〳〵業と成さしめ一萬れ事。おもひ
のこさぬ折〳〵世をそなのよものうい
ゑ一とせ清盛の傍ふ籠居れ法。肥の
前後西海より卒ふ猛煙立ちのぼり。た
ちまち〳〵きこゆ前濃かこりを排。而
我の数勢。めづ〳〵かゝる行雅ゆく。はた
海より迫むふ。愚分をゝれよひまを行
て。こゝを始終粗思ゆゑと。まことに自他
の変かう〳〵治乳の神仏ゆゑ。あり

海ふ侍まゝば。こゝ揚よりゝゝゑ郷嘗者
ちこゝきう海外〳〵かるへきことありひあ
ゝ生ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

ありやせん。唯おゐかよ身命ゝ事
と。言葉をかさゝどありけまゝに經
ふ今海草

鴻原記巻上目録

一 吉利与用始發之事
一 松倉人數深江村へ押寄事
付 郷人皆高来之城へ注き入むとせ事
一 松倉人數籠城之事
付 城内より三江村へ撃ふ出事
一 天草吉利与冊蜂起之事
付 大矢野大司庄搦捕事
一 天草城代三宅藤兵衛唐津へ使者立事
付 唐津勢天草へ押向ふ事

一 鴻原一揆之徒蜂起天草四郎を大将立事

鴻原記巻上

貴利須檀始殺之事

南州は忍びとり吉利を冊といへる家に見城法朱は
ものしをかうへのらうをもうふとてよぢごいふんこりはて
えのしへぐいりとのくがたいきのしはて為ものや
しかうりきんをでよ元亀天正のころ為ひのたぐく
ようつもうすとへるあ洲しその名ゆうをしりぬる
ふやきかれいらく予鹿若はあ為めうぐめりのきに
ハうのこうしはそんへふじそまんいくまんがでいれ
とのかんてうかぐんしあまゆくこ為まひをひそ

かゆをうちんをあつらへるゆへきのさぶりどんふあ[illegible]を
よをんとりのでいうとをきかりあがぐちんせばどんを
ゆよいかりて・きごいきうてんめいらうかりとをくれ
かりぎんきごくをぎをつ。秋津洲(あきつしま)をさをんよをを
ひぎんかんよりりてぐがんんいをれをうんよめいど。
一のをふらんしてをれをきこうそんをかうきふをか
ぎうぜぐめんあのきうふかしんしをうりをうるふ
南蠻(なんばん)雪かうちんをとくのへちうきいしをれをのよ
かをあるあいごきよををあれがくんらめちまれて。
ひんくをうりくていをれあいをかすきうをのをかく

どをあつぐいひかんかいてうるまをてきんつくをあるあつご。
をんちうぶごんれきをうちうんらぷあうじれつをうくふ物を
りくるをれいまをひぎんたうのちくめかりとをう場
ちんてをちくくていうをとふをんきびをうれいあくぎ
やくぶをうれやうくかかをふくうへぷきのすをでをいそ
ひをくをきをうをそをふいれをてよをいをよををおかゆ
へよかんてうれきをうをうんかぐくあんをくうりそをを
きかりくを東照(とうしょう)天寺(てんじ)をのひをそんかくありをられ。
ちまをぎをいいをををりひれかくをうちかりをを物ををは
ぎをきうをんかりくをふをうのかんうんをきびくをきう

たりあり〜ふるまひをかまちたうしをかめることありぬ
あるときりんようふくやりひいりくる川だ〜ふるごと
やりぐんとをんゆんし〜ちうとりよのをこをたるか
をあり。たるあつぐきうん神ん日蝕西中ふ吉利与冊
といくるたうしをものとくくだんぐりしうりぬと
かくるぬををへらくきうくれをぐうをりうをんと
ゆよまをとをいふうとのかんをのくかをゆ行まつり
ことをあれかんをるよをうんそのしをこをとあて。
ふくうあんふれをりう〜ふくよ寛永十三年丁丑十月
下旬よりくれ西肥前の西ぶい鴻原をいひ〜と

あるれをりうんふうをよふぐきををひそのらんしやう
をふりぬるよふあのををさりのをまふ〜れ守護をは。
松倉長門守勝家とこうふ長州そのあるの武将
れ行きうじふそて武蔵西よさうきんをとをよ
吉れひよをやうくいきんの鴻原のきりのうら。
いふへれ吉利与冊ふとり〜くあたくり天守
のきんりをさあるをさぶるあつて世ぐりれせいひつ
をあれまちよそうじうし九州れきうふようをふ
ふ〜あまりさへ天下れひやうきをとりりるをの〜
りれきんこうい大矢野松右衛門千束善左右衛門大

江源右衛門森家意軒山宮左右清ひとてらに五
人はかりにてきたりたんのこうつまりそそきこべ。
加の五人ものとも小西摂津守のかゆんをり
きうちんのぎをりより天草のこりり大矢野の
千束といひ〳〵きまふさきよりうはものかり〳〵ごき
ひ神んの肥前の高来はこりり鴻原はうち深江
といひ〳〵ざい〳〵よりかりぢう〳〵神んきをお
とりぬかのものともそのちあきんがりつんこうは
こんしゅうをちらをちらげきひとかりよりくめをかり〳〵る。
ちゝかの〳〵きれきりよせきあり慶長いつやくん

おとらあまくさ上洋浦かむそきん一人ありる
をてんうきんかうふよそのちあ異へはかの
川あるかのだそきんそのとさ彩鑑とかづきく
一紙はきよものこひそのを留せさはうちよいる。
向年より五三はきさるうかちよりひくきついさ
かぢんぞう一人きあつせうしかゆ〳〵ぶうきよし
だうをあつうしりんぜんうべ〳〵さあ〳〵ばこう
ざいうん燒〳〵こぶ〳〵ふかゆ〳〵はしかさうぶきよ人
の〳〵らよりるひをそて海ごう野山よきりた
かびきでいうをを覚時も可ありとこくいまは

ゆくとものさまよしゆをとうんぐへんるーぽうゆ
おまづりまことよめいどんれゆいきよふくうらびこうごい
ふをやらることをひてーしきうのミかーげたはが
ふらのさらーをんらーぽんでかうーんをあーりを
つぽまーこぜんごうかーいぐるふきよぐくをあつう
めいよれことおをのくーつ〇よきうあてうるぽまーき
墓兵法ごめんーぐ郎てうぽいまーごぐく神ーうう
といへとをきりしーうんれぜんあんーうりかうごい
あまゆ神くかーぬ人すーぎれべいかーへていうとを
そんーやうちーをりうーふせぐうをかんせいよ

してめこれかまどめゆーうこをぐーゆう
れきんかうふみをまようをぽきうーうんれちう
をのぎをうちぐうぎんのきんくーよおをむきー
ちりものうこぷーげうるきぐーどめおせい海
いとかーこぐうかうりかきのうきてよかまーでいう
ものめぐこいまきてうりんかうーいふーへきん
てんあんをおりひいくーふきんーう
れひとくーふあうぐーよちんまんあってんれ
うあーこあいをおをきんとのそこたまへぐちし
をうげ海ものてんかのきんかうとてきーうの

ぎいてよふきよりおらるゝことゝよふをとゝかゝ沙ゝを
ゝ〳〵こゝふきんきせどきうゝうんをきん
かうをんといひるるふあまやえ弘のきゝ源兵
清正成ゞゞんゝゝゆをきゝんゞゝあてんきじ
みらいきふをとうをがうきゝとかせゝゝかと
かゝゝ沙きうるかをとよゝうんぎ百ゝ首農ゝ弓ゝりをよ
ゝとうのきうゝをかうふいかをきうらゝゝゝよゝた
ゝうゝ沙りゞゝゝゝれゝをりをゝくゝきゝゝのゝよ
ゆをひゝきゝゝゝうゞきふきんぬんをゝをかゝ
ぬゝかゝるをゝゝうよかゝ沙ぬゝゝきゝゝうゝゞくき

ゝるかゝひゝゝゝれゝをゝうゝゝゝ小左志ゞ右清ゝといゝる
やゞんあゝゝまをゝきゝうゝゝゝんふきんゝゝゝ者
かゝゝゞゝひゝゝてんんのゝうきゝゝよゝゝゝりゝて
きゝよゞゞゝゝまんゞゝいうゝとゝゝゝゝゝゝゝをく
ゝゝゝきゝゝいうゝゝゝゝゝゝゝ

のとをくをくをく

色のきいまろくるぽちまを流えて一ぎの爲にもち。
あはいふをりくるの家ーとしてまるふてぞ者
は者ともとりよりくの代官をうちまはる
ちうぶーぽちまどでちうのもんじやうはち
めりくあんかまぷくるてんうちりをーぷま
かんて貴利ふ冊よぬきいせみてげくうてんは
めぐこふそひきぷあるーんとうんぜん
かりぷんーもきりくんとうりくて。
はあいこきくーくんをてんうふせみてめーを
ーうりむをはきんとぷそきのむーは者

ときとりよかーそのさんまんはざらくーう
は者ちをあるひいぶざやうぐんらあるひハ
田畑はかりくーよりぷよ多くきうーくんよ
きいーのはかうぷをくるちうちうとこれ
めーぎは一きぷーまはどありのどせるきて
アとぬとそこへーー
松会人数深江村押寄事
郷人等高槻城つを入むとせーー事
さるかとふまりくーるまのは加ろうともぷはむ
ちうきんありられぷものくー者きふをとうさ

ぶこうつりていくとて。ぶまのり十ぜんさぶこう
ひやうれんちまで三百余人。ゆてうかう八十よちやう
あひそへのぶいさるべくさうしまいときちうとう
ちべきさうしをいひつりくるあ。ゆいうこか
月廿六日うれうくもりとあるふ。深江村へを
しゆせて。三百よ人のうれとをきをひあまう
て。一きうかをきれ。ぶをあきくれ。きりしうん
れとをうきをりごもるとあまは五六
ちやうれ。一千もりおこうてだいよ
てうかうたちぐへうをせんとくせあゆうぶさ

まども一きいあせのりたゆ。これ者ともいうづ
う三百よ人。ゆくうかへしをいこへざりそりし
りといへとも。ぶ。ゆうぶこれてうかうゆくまり
さうきうけしかうめんを二十よ人うれたをす。
きりしうんれとうとをちまをうとこうをき
せくまひうてるくもれをびぬこへをどりあへ。
おあきさまんでとをうとをまりくうこれ
ひとくを。一人をりくさでとぜんごきうを
とりごごまりさうきうけれひまのり五六きぶう
ひやうれこまで三百よ人。やふにうくをを

くり目ちゐさんやをとりめとりかをとりをうば
ぢうぶとさとぢびとりあ〜そ〜てうかうのまこ
一ちもあるこやをとかりとりこれをとそまつく
ぐれひとりくぢあるくれぢうをうちうちうかは
ぢうめんれ屋門とんてぢんぢんぢぎありとてを
むぐーれさてをゆをとおをこへきこう港刀強筋をも
いーいこう一くゆふーめとり武勇れかとをづう
めんよみをくやかんとぢいさこーがかまてうをの
どうれふぢいをこそてせんぐんをづる者をかく
一せんめをおよらすさんてふうらてらき

あくれ城ますてひきるふあきまーうり次
第ありぢあまりさへをうども一里ぐかをおいう
ちーぢいきをひょぢうーじてぬくれぢうー
ををあんとてりこにりぐくをーよ殆ぢ為
ぢさ町をもやきちーぢ為ぢれひとく
詞々乃ていゆくぢうるいへとりこをるぢう
人れ屋ちーやてけくいくをれけあるて
れきとをうれやぬりぢ一のりかをかりぐ
かうんちーれをとれんゆこりおくりぐず
してあるひいがうあるひいーひやりぢあきな

きかせてをとりりんていやうへようさかり
とれもくとすめしもの城とかい長州親
父豊後守こてらへをさかりくやうまいりたこ
ぐいとりけりこさきよりおいけひとくこ
あをせんとくをさされたる為ちさのてつやう
しきりりうんの屋ちもくこ二百よ人うたまこ
くれぬこてりふこけさてうらをつくせ
ひるかをよりをそのやりひいくのさかろる

松倉人数籠城れ事
付城内より三河へ村へ糧取かあり事

きるあのこ松倉これひとくぶりんよ恐懼と
あくそのくれい一きくこちうだんれゆきく
まてをあくひとくへよあくく高米れこやうとぶう
あんよのくまでとのこちうやうめこうあよ
ひくれぬされとも城門よ長州為をいれていあまこ
きうひとをもおうくこ為ぶづう五十うこざこう
ひやうまあれ七百よ人をきこ為ぶけあん
いみあをころれ者ふくありくめうりぶとう
か所縁れ者をかれぬけくいの屋ちもくこ祇
らんきこふとりまこうも城門れぶぐをぬをこ

もてはやしてあいくるべんをもて
けぐうめんとつかよしこうはいかりゆるさるべき
だ城門に人をとどめる門ちかくよりとえん
じくれ下僕よりのをはいゆえんをもきさやり
ゆるされもかくていかりでとてやうくせん
さくをもぐし。数百人ばかりより百よ人あつひ
いぐ。ぐ城ちうちよりどつすかをとも城門に
ぐくいりとかくことをきくあるをあぶゆんゆくに
らうじやうんかりくうきんをんに御うせいを
こはもやとにせんきゆく鍋鴻細川あ公い在江

戸かりことかれかうに城家屋よりあのひよ使
者をくそのせいをこうはいかりくるこれよりそあべ
きまよ伝法寺の腰成に城豊前三千よ
きゆく。出陳し鍋鴻に高りて彩造寺より
五六里をいてまが刈田庄よりくり細川
越中守忠利に面寄をおりい忠利傾者ちといひ
し者人数三千よりいんぞつ肥後川庭中
いかとこうへをいぐこりくるぐきれもてん
の御ちうとよだとんをいくうけとある
そそも御ぎかきふぬぬるりそつぐよ人

数ていかの逆賊かしんとうゆくをさそてのこ
かのきいの家臣どもは愚慮よりまつかはいいは
やあんとうゝびくく落西の御目付豊後府
門よきてよりうある牧野伯耆林冊波ちへ式う
ちゝしんしゝうそれかいゝ〳〵上意をまりうへ
しゝそうそくゆちくりとふちうしんし逆
てきゝびをかさんとあゝうあゝりかあ野へ
さゝしよいてぎりそりかくるのびゝかるちゝぎ
かあよりて数日をうゝいゝとうやうきし
て八千ようきかかるとうやそのゝ一きの月

ちゝあくれ城へをちひとへよ戦争
まいりてく豊臣殿集はいとぎきこへゝ
かゝて目ゆうつるかとぬ十一月上旬はあ鴻
原は城より北のゝ三沢といひゝざいちよあり
これ三沢とは者もあるふて城内稲垣
をりゝかをはのひゝよ勝敗数万石は稲
葉あり城門より兵稲とをんぐゝあ島のり十は
五畳つゝ三百よ人はそうかう百ちうあひて
えくの三沢村ようしつゝいくゝ三沢より三沢
はそのあいて一里かくそありりくは三沢村び

あまをとめ〳〵まをしきりに〳〵てんまをきらひ
きらひてこのりゝうまんきをもつて若利を冊給あり
りしをとゝのくこゝてをこう数百人一家おどろと
をゝしをせられはきらひてこれのともあるそさ
ぎきりゝてこうかりとをもつてぶてうるあを
とりあへをとゝれはきをめをそゆけめくるそのをきを
きらひてこりれ大将よ高樹孫次右衛門高島三
左右衛門入道若狭守あまをゝはんをそうかりゝ
らありゝゝ一見をきりてをうちきゆをとを
きをよくるをのりのんゝひとをゝをめをよへ

ず城内をうてひをさゆくるをのゝ郷人をも
みかの近郷をとゝゝゝをきりゝうんをきをゝへ
いまを根義をををうれやうをうをひをとり
ときをへゝ

天章吉利を冊給事

付大矢野大司正ゝあをゝる事

かりくるをゝをうを肥後の国あまををとゝて
をうをを石れ離鴻ありをあまをは寺澤兵庫頭忠
高れをやうをんありを氏鴻を一万を石れをいゝを
をゝゝゆをきりゝうれ家引ををこををの

ところにをうりの蚩尤あまつさへ蠻夫長湯
と申者ありの長湯きりうんの家名代
備極に者ときこゑ名ごりの長湯
名ばかりとなりて順治ひそうきり
あんに家ゐを進教して近年は肥後四郎
土に郡よりさくしに年をとりでん
さくきうきうしいまの海をいとあかりがれが
子よ四郎といひくぞのころ十六歳にてはい
ありぬ智あるぶんの者ときき普通ゆとぐ
ま儒学ゆりをとまに学兩悟のうりゆく

そのありゆりあまりさへきよりをあつへ
よきんを任見しろるあつて名誉に者とそ
人とりあるきうるふりて近年はかんん
四郎よ方に遍進さに長湯はあ隠居のう
あくきうりるさんに郎きよりはとと
はつあたりきくとあるきうんよ
みもるゆりてんの吾心をひるへあれこ
そでいうとにもれりあくれつゆの海
らとてとくゆに氏家名ゆりをそあをい
むあとさくあるきうさ四郎をのごこきう

あまこの父子なる所縁言法はしめあまこと
えこへひとこへなるまとしてあるる時に鴻原をこ
あとこきいてあまとつさめありくを郎父子天
尊頭民は者とも也とまの移さこりをさてをれ
らやうふありくさ家百おひとをんとす
まはてんは清法と三ぎこ
かをとのやうくをくくはやう
をあんどるふは家百とをのの称ある
をとうかきをもかちをあくりん
同ふあくるはをくくはてをくくい

いつまはうちふくををあくはをん
百ふひををあをりをくくををくを
あくをはくくみをりくくを巣めとをあて
ていうをはうあくを家ひんをはうは
ををりひををあををらんをはをりをん
ふ傾起をんをるをくをのふくくををくく
をるくをくくををりくを家ひくをりくをんくと
あふひはうちふりを鴻原は者ともををの
細教をふをくくををんのををををくんをん
をや意起をひくをくをををくくをくくい

をもていひられをとこ　ありあけ大司馬
源通小左衛門といふものの妻に源ぎんざいも
矛に郎ぐるあり　よは叔父の妻はいとくさきふ
どうじくるうへの天矢野をりあとてて矢
数中ゆうんはいこの西のかりをのせ一きのくり
うてをのーぬかうへいまことでやうう
和昭風やうのきこうに郎う老母兄弟をも
字土氏紙よをきくれをこれをとひきう
まる字土氏紙をもは宣ふをてもちあんとや
をりひくんの源通小左衛門ひそうぶと下に

五人ゆくが和小のり。細川越中ち感利のうや
うの字土氏こりり申氏浦といふところう
和をよ野ありくる。きられもあま弟一きの
ことやまんゆよかく。肥後氏大守氏国
下ゆくみをくくよかゆをとへ。清選氏者をて
をきひーをいさくとかよをて。小左衛門つ
練練のうきこうそのまりかめこれるけ
アをあまりざへ字土よありまる氏郎うもく兄
弟きんそくよいくるまてことりゆめーと
きやてろうやとかりよくる

天草城代三宅藤兵衛尉唐津使者立事
付唐津勢天草押向事

さてとやあま草へきこゑのこる一きとゝも
もよおせゝめさりかをきこゝとゝいきこゑ
なれともいあるへきめくあゝはこゝろその流ハ
いゝ〳〵一きけゆさゝをかりひさこめて年
貢搾菓ようるまてをこゝを公納いさゞす
そうをの〳〵よくつとうすあま草ぐんこう
けぐいこゝん西石はけさゝひとゆふこの〳〵を
見ゆゑ〳〵いうゝとさゝゞまいゞゝけとんう

うりなれともゆをせいよふをいうゝふゞゝくゝやまりひ
りん。とゝ〳〵ゆ富岡け城へゆけうりゞゞうゞゞい
三宅藤兵衛ゆつまをりまゆこ宅者さふをとゝろ
きこハいふ海原けかりさゞのそうまゝ〳〵くき
さけるゆあま草まゝてう海へゝとゝありひを
りゝゆこれ〳〵ゝとゆあゝゆさあゝゝ大やゝん
と津海道ゆうんりてをゝをきゝゝけるゆまき
ゆをいゝゆあゝさゞゆうきゝゆゝとゆ角ゞゞて
新海とゆ海へゝとそ多勢百よゝんゝよゝこゝろ
けゞゞさゝゝひまるゝゝゝうりゞゞいゝゝゝよ

めーおきてがそんれ者ともまゐさしまゐ
百よ人ありくるぬてうかう六十よちやうひの
ひそへをてよのざいしーしへをーもきんそ
くをしーれけきぬのゆびきてうーごいを
ひ田おれがそんとも心りーをそこいをんと
をめくゆへとぬやあいさうれ一きゆくゆ
をでよちやうづーあうりうを矢船千
東ぞうくぬやかきれとをふいるまてど
あとをもや吉利ふ冊ー心家ーうと者
えひそのうへうりむーやどををさうくさー

ぬうんきふうんうそらまごちいどそよ
おりひをはぬぶるやくむかーうへーとと
さくあ西ていをを河そんーのくーて
河物をちくさせたまふこといやあんと
ドりれぬ三宅をんとをやををきんさあく
ひまげをこをの城色をかーきんめんと鍛宮
ーて道ごうれ河ちれれ刀書をきちゆうう
こあくくつへゆるちうんーてぬ城を
そまゆきくるぬさそくくつへゆのーきこへけ
きこはあゆををとをきふをどろさぬをく

ゑのあひうらてはひろうぢやうまちかくかりやをたて
とこと密高海をとゝのへたるなんこん一意
ふまうの砂ごうくぐ老人りちりあひく遠宮
ちりめく日をなるかぶかとみあま者一
きれ芳利ら冊ものあそこのむ〳〵ちれざい
つとぶとて〳〵をしくみかきりこんおちてこが
ゑきぢぢんそのうの海よ城こと深意れ武民を
ふうめ城よりちようちちとすようてぶこい不
進れ者ものとしくゆこそこがひおぞれいあじし
ちんつとをゆくかこひぬまをけどるといかをれとも

とこをもうふれぶりきこんれなこ宅いよ〳〵おと
ゆくこかふとてこれの人くなくぶぶいし
をきくかこあちぢんれ遅そやと掻頭拳
弱よなをちまくれともゑんきようい海をへぬつ
きふりすをふかこはこうこをなちちこ
けまりて空十八里の海海をなちこんれ使
艇ちぎあへとぶこれかこれおいゆこんをめつ
まへこちみこくをこれ〳〵をのうこお一き大
ぞくれこり〳〵きこりおきこをけきをれなりこ
きここひとをうちこりこかや三宅ゆまこ

うかてのことかてゝ周章ハ人々ゝ老耄たるまゝ
ゆゑやされい名を名〜さつ〜ひれむかんたんだん
とつふとめさかてさりぐ角さや〜〜か〜ゆゑして
さ〜でんぶ野人れ一きり〜〜鍬鋤をとりて田畑
働こそいとをかりとそ武勇ハいうてもるへきそて
あまよ常へくゆれゆんちまゆきてけら〜さんと
ひを静れていかまはゝ〜ふおよゆゑんか〜ふいと
角りてれこ〜んといふ者ハか〜〜。爺ともれ
下知かゆ恵高公さい沼戸常ちを面ていかれゆて
あまよ常ハ〜つの小鴻かり武城下とあきんとハ

いうあるさんぎかりくるゆて。一きり〜とありひう
鴻きかはいそのそみくちりつまをゆ
ゆふまう野ぐう〜。されいそ武みちよいつまを
をりきく〜さ〜めんゆ角余れう〜ゆをあ〜ん
づまゆで〜とりかさ〜ゆていそきを角つぐんゆ
へ〜とゆの〜〜常あひをんぎかゆ。さ〜〜ゆと
ぐ〜をとりくれゆまゆ園鴻次郎尤右衛門国
角七郎尤右衛門澤本七郎兵衛原田伊与守武
人〜う大将かゆ〜。千五百人いんぞう〜十一
月五日ゆひぎをんれ〜〜れと角つをんを〜〜。角ん

ふうおやをあぎ〜ぞ〜ぞ〜き七日ゆびごの
あまの弟こりをとこをとれ城へつきゆきをる
をの〜人馬(えば)をりあげその夜いとこをとゆ
て。夜をあ〜ゆりをとこをとれ城より五里かて
てきぢんへいり本海(ほんかい)といくるところありぢこ
海へをーいづ一きのていををきゝとゝけ
そのきゝをべ〜ゆうづ〜まて城をりを〜
をそんを遠海(えんかい)のれい敵徒(てきと)不相(ふそう)のうちぶん馬つ
うを河(かわ)いうてあひゝうをれをんぎゆく
をの〜出儀(しゅつぎ)のどうづ〜あつる八日ゆいをこを

の城をいで。海(かい)渡(と)ふゝういをきゆりる城(じょう)
渡海(とかい)みれあゝりをとゆをきこゝりくゝをゝ
為掌随(ためしたがう)をゝうをゝりんゝらゝゝ計策(けいさく)よ
ゆきこめてゝゝ川勢(せい)ぢゝゝぢをゝろ一ゝゝづ
れをゝ城口(じょうぐち)ゆり。吉利(きりし)ふ丹ゝゝかをゝてい
ゝをゝをゝかゝゝゝ川海(かい)をゝ海をあゝを。
ゆへゝゝん河(かわ)うゝをゝをゝて。ゝづゝゝふゝうゝんを
かをゝへゝ。ゝれゝゝ。ゝをゝをゝをゝみゝりを
めゝゝゝう城(じょう)ゝゝゝ夫(ひと)をゝけ。裏切(うらぎり)をゝをゝこゝ川
宮ゝゝゝぢゝ武城(むじょう)ゝゝりゝゝゝれゝゝゝ海

らりもあまべとて鳥羽鴻おれてうられ人ど
ちもをうつ〜ぬとりこあるとそきこへ〜
かぬところよ寺沢人じゆいゆめもこれを〜
らいこそみかうんをくよどんとうてきころれ
者をうびめ〜ことれやうをとひれの所豊も
をとり一きれどうあいりれぬ〜りこれ
人こを物ひのま〜に偽誑〜ぬさうひ式あい
ぬうづ〜へんれ者とも鴻ふうちよへ使を
う〜うーやう天帝ふうんきい〜うてまり
ぬうりーまこいとあ〜いぬ〜いまをと〜

ようせこと〜ゆうちちうこうんひこ〜ぬ
鴻ふとうちきれ者ともぬこひよ縁眺れこと
きふ一回ふりをあいまーて忠高公れ浮
せのまんをうもつていまこう〜所ちをそむ
きこそちうへきこふきうやあーんとだひよ瀬
諾〜まりうきれどころぬあまりさへかぬゆ〜
ていのるけこいまふ〜ふどうーんいうすべこ
あくこうれ金んゆうけうまつうのきこうらを
をうへ〜ゆうのそんを鬼れ浮城代へれ話言
よいこうんとそんきこ〜むるころぬうづ

ら代官所にもうしてをやこそうとまげそのう
ちうちんの時刻をうけ〳〵さうくわんいんはつ
つりゆきぞうれもそのゆへいつもやりひろんまま
お尚西へとうつてをこさうゆこれいなめ〳〵とこと
ゆきぢ城代ぬをそれとあなくゆへうさこめて
御勝これまてぢ御ちんとごうんこうけうあ
りゆうくあれ〳〵はうくれやりひとあ〳〵ぷうさ
むはうまうつるゆくこうゆらあさうあ〳〵ゆとも鴻ゆ
ちへいうまりとの御一和をいさうをなま
ひかゆの池代者をちう〳〵をあうづ〳〵れ

りゆをとそれなかうとそんしゆとりれそ
をあ〳〵ちあざとうともさうあ〳〵こ宅藤
ちゆを大將をうてあひともあ〳〵者ともめそ
林又右衛門をあ〳〵小十郎大野助左右衛門
枝清左右衛門をのかりさゆ〳〵ひ十五六人つゞり
二百よんをてうかう五十ちうあひそへあるる
九日小鴻子小ようゆ洗ゆ〳〵る氏鴻子とりい
南よこる山ぐとうてを北い海よびやうくうり東
西八山道代けうゆんあれ〳〵ひ一隻うちゆん
あ〳〵ちよりりの鴻子より敵おみうづ〳〵まてい

ようう一里ばかりあひだ　ありみてこれぞ　ちよ　海
ものなるのあひだ　ゆ〳〵　あまり　さへ　一里　ゆ
遠　干潟　ありなれ　なる　ゆ　ばかり　ひ　ゆ　ゆ
ところ　ゆ　ゆ　ばかり　ゆ　ゆ　ありとて　ゆ　ゆ　ゆ
やうう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
加賀　て　墨潟　七郎　左衛門　柳　五　左衛門
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

二十ちやうあひだ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
海　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

鴻原一揆の注頭者天草四郎大将立事

さて鴻原きりしたんの頭民者ども、ちらのうちに
はひろうちろうふへ大将をそめへくちよ
あんけのものとむとはじめ。金脇のかてうこうり
いさうの三郎を家の
あんとをのくひろうぎ一さうして。鴻原のうち
きけむ〳〵くらり大矢野の郎うところへはせ
ひをとをそ先年家のをがんあきらること
こうけたのあり。郎とい後貴童をきりふ
むけ正源よさごめぐんうんぢ下知よまりを

あんといひひろりぬ。きて。あざかあひくい
をのそれ人数を著到し。尚家のけ折紙をうく
きくめて。早速持参べし。あまよ弟ハ也ハ我
家のよきい者ども。五千よりて大矢野
色津よりぬと。ぬきハ鴻原村くれ
人数まげ八千よりふりて。其頃農者ハ
ひげ下知ふまりを折紙判連をうのへおまよ弟へ
うちこへ三ひかくと云れ。ひあつされまゆを
ひくさ我ふまこ三ひくあきふ出れきいさく
ふやよひくぬとちとるものくれ謀智ゆんときん

ぢてさあらいに先鴻原へうちこ軍ぜいをも
ぎだうせんと鴻原ぜいたいひ在へうち
あ一ぺん遠地離れわ鴻を後合鴻と名付ところあ
なのこんそれひつうちだうりよ兵人数一万二千を
二手かしはそださ浜りに浜かん数をさ一をさき
長濱へ使者をこして吉利与丹よりきいよをひて
ぬを一よ弱火をとりけいのうし一軍神りめま
けりめんと宮ぢうくとざちだうり一てぢちぐーはう
つるめんと用うこをかを一とをさこゆ
鴻原記巻第七終

鴻原記巻中目録

一 吉利与丹弓る鴻子へ取懸事
　并 本浜合戦ぜ事
一 唐津勢富岡籠城ぜ事
　付 郷人弓る富岡ぜ城再攻ぜ事
一 鴻原天草ぜ徒党弓る為二退治諸勢揃向事
　付 一揆郷人弓る原城へ搦籠人数を記事
一 十二月廿日原ぜ城一番攻ぜ事

鴻原記巻第中

吉利与冊等鴻子元懸事
并ひ浚合戦之事

かゝしこと為よりなや浜ゝ郷人等時節をもはりひ
りん。ひそうゆ一きうこゝゆちうたんしこうれれを
上津浦ゝきうりしうん等。ゝとうり誘有ゝ者
ことものまゝゆふりしゝ鴻原へ行ゝるゆおよゝ味方
小勢ありこと鴻子ゝ浜ゝ軍勢をけちゝさん
ことうびをめくらゝへゝ浜そそ十一月十三日
ゝでゆ鴻ゆかんとへゝゝんとしこうりしぶふ

八月朔日より後とて。廿五日十五日そうそんしのぶ
らせんとその日はじめ。くさくさまりぬ。ばかこと物
小鴻原大江おうちよりてひろうちぐうかせ一一
きとも唐津勢ゆまま軍退治おとりうちゆふ
よてうぐうぜ者とものさきぐりくをしらす
ひとなのくきいく長濱へけてぐてけひろうぢ
ろうとさうをきぐさ〳〵ふまりあまま軍へなを
よ野〳〵代勢を謀代〳〵多りとけをうりを
らくゆがぐさきこへをもひろんと宗郎時貞ゆん岩
五千よひきつまらく小松ともおりのりてあま

軍かせいよをうりうりますれよ上津浦よりぐさ
よりくとけやうを吟メれが豊晨よりせんと
きくくとよりをいよ宗郎さいくよりさありて
ふさうれり寺沢人数かりの勢いけよりを
きくもすぶともなげてよりとべさとはよりをりひ
よりさうくりぐされぐ太公が兵道けとバ。
兵勝の術はひそりふ敵陣けさ様さりして志
かとをみなうふその利よけりくさくその不意
をうてといりゆぐと夜深更よおんで河
内人郷鴻子ちくへひそうぬ人数をもよを

来ぬるよ鴻ゞへとりつけんとまをへ鴻原ゞたん
者どもゞ信元ゝ〳〵ふゝゞよりう〳〵ゆへし。
あまよ者人数ゝ山ゞより押よを海陸ゝりゝ勢
一ゑよどゝりとゞきゝゝこゝをゝたりうけゞぜんご
をゝたゝくこゝせあうけゞ茅ゆゝちうゝるゝ〳〵勢
途をうゝゝゝゝゝ中〳〵一〳〵てをあゝをへゝゞ
ゑゝこ治宮ゝ勝軍ゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ひゝれゞみゝりゝもと同ゞゝゝ鴻原
方ゝゝうゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぐよせんをやうもを見てうせべいそぎ。ちう
ちんいうせとして。五六人皆おきて。うつとよ
つとゝ泳みを見て。こゝ海は者ゆて
あり〳〵よりかぢ〳〵へちう〳〵んをいそぐべ
き。長ゝるとゝうとうちとひ。物語がで〳〵う
座川勝ゑん優徴れきさまよ。ぢまゝとゝ云
きのをゝとて。ふ夜浪ふかり〳〵時こ泳らの者つ
ぢ〳〵ちうり。見と敵者ゑ。者〳〵てを
まんぎれ中より。白ちてこ白ぢる〳〵ちびて
ちう見んへてゆいそぎまんび中浜の方へひき

とゝ勝ちひ。行まとを河一ゆゝ。河ふをぢ
ゆべくゆといひそれぞ。こ宅義右衛ちあきよ
ぢで泳ぢさかおとゝ。ぢで敵とのるへいうかとあこ
えくあるぞ。太刀より刀より馬物具とひ〳〵め
くとゝ泳ぢおとゝ一撰の者つぢ〳〵ゆへれ山
より鴻子れ東の。ひ大蟲のきゆへ。五六ち一
度よぢつとも〳〵よ多れば海をゆりへ鴻
ぢ〳〵れとゝうぢゆ。ひゝとゝ法きゝ多。
これを五ちよう城あぢり。東ぢ〳〵れ一き。一同
小河のこゝをあびれば陸地をちんぢうゝ。

あひ〳〵ちよぞ〻きこゝへくる。一きどもぐちくよ
ね。雜働の書の者ども。ゆとこれ雜よりさうまを
く。白布のもこと白紙のはがりをいうめもう海く
うらくくうのかんぞうの色つちくようう
海よさくせ。左右よりこをくるかをよ。一人ち
もちこがんぞくぞさ。ぞうくるぞうるる。海へ
むい偏よみか敵とちこをのくべめんまんぎこた
見へちうぞこうあ。ぞくくくる。まことに右よ天
の事かまこば。紙がくひのまりまよ悉墨ぞる
中よりぞんのせいきをさくくめげくるあ。

敵〳〵きこも中〳〵よりに敵よべぞりくり。
りこりあひぞの事かまこば。ここ海はぞうく人
どもてぐふ敵屋よ央。をうけくまぐがく雜へ
炊くくぞけちくくるをりこりや。海原うぞの
者どもへ空部ぐはげちぐよ隠てあまりちこらき
ふ蟲かまよ原中海のかよひぐりりふさざ中
よりこあうくべきをて。西のをへこうみちく
くれりんともぐうんぐこふふんぐこへあく。
敵の情をべ知る地形のけんめんりてこりの知
のくくれが武家の時ふをてふちいどんちふへ

あり。こうれども。大将三宅左右衛門
ぬいぐいせ〜まる。かんどの方へとやをひき
ちりちるとかや。こちらの軍兵はとりかごまん
ちりれば。せんこうやまろん。南北こる山
よりどりあげり。とりとの方へ為ものを者
うりちるとぞ。きこえ〜。山南山はよの法の
人忠かのつべきこと為ゆくはあ〜ゆ。
まことの時よはけんをきこ〜ぶ。
ふけをる者〜ふ。ゆげのびりるこうあさ
しられこれども。その中ふ。林又右衛門

く小十郎。大野助左衛門これ〜三人はもひ
ぬ〜ゆやとぐりめをん。者勢一きれを中
ゆく志ぐ〜さ〜ゆ。ゆ〜ゆひ。吉利ふ冊れ
川ぐ〜を六七人ぬり付し〜ぐ。ぐり勢いを
ぬぐ〜ぬ。ぬせいよぶせいとさ〜ぐうゆんそ
てゆうれよてゆゆく。そのゆ〜そこゆく〜うち
死ぬ。こちゆの者ども。ゆ事とゆ云ゆ〜。右
徒左徒より逃ちて。敵徒よおとてをあ
ぬ〜うひぬるゆ〜ゆ。寺澤方の軍勢廿
余人うるまるぬ。きり〜えの角川ぐ。

ことごとくめんうちせんとかといぐく吉とよろこぶ。そのまゝ勝ときさけてりうけいぐやうのきおひわく。中液のぢんよりよせんかん赤ひのもとりを見より二里はなるかまばをとり〳〵塩をひのさてんどをあとひかをよりあとて。その皇ゆうくぐかりくるされば三宅友惡ゆう〳〵よ。ひさとんつて柳のせとをうちもとり。澤木よりうくはよりをそれぐをうゆく一戦とゝ申べゝ小勝よて中〳〵勝利をうべゝと有へどもうかん

ぶよりけをとりいぐきをゆぐんとべきよとはやうをきうせあきゆくひさうけ一きのゆうむゝをくゆく。追拂せんすあとうべゝ。爰ゝをうこるうはさへ場のまども同よあまりぬるをうらうんよ変るすのきばをを勝ゆこ作ゝ。兵歌を半途よ妨滯せばかんどのいくさ作をべゝ。ふくはとゝきむ角くあるさきゆくまいアあべゝとゝひとをくこうをりくまい澤木七郎兵衛ゝりよういのすあれば

らうぎうどもを近付てあひかまへくくこゞ
三宅ごとバをきゝてもぢか勝利ハ多ゆゑよ
らバこゝ家を死場ときゝむべし。それ侍の
つゝのぞむハさゝよりハ見とゞまるこゝ
小勢ゆゑ。わるい大軍ようちゝこゞ日本一
ハ高名なり。吉利ち冊をいつむゝかあ
ど召近よせてうりとてを沢味ゞあひゞを
ちゝく。一ゞりよりうとりみて言てうむう
をとちゝりべしとこゝうふきうをいひて
め五十よきこれ者どもをあぶげへさゝりと

ひさゝ〳〵。こゞまりうへうて居ゝりしが
とでよとこゝうハまゝうゆハいさゝとゝんで
をしきゝ。妖ゆ。おゝの見るよりと時
ふ吉とゝゆりひゝん六輪の十四裏長路ハ
いゝハ家ゆりといさゝむどゝりをちゝ〳〵ゆて
一ゞふゝとをこゝうゝて家をさんどゝう
ゝをれゞゆゞ矢ハ一つをかゝれゞもゞゞ
てゝもうハよちゝうハすゆきゞ大勢のと
とゝゝをこゝをゝけゝきゝゝうゝ
てゝどゝうをゆゝもゞゞうゝ者とバゆゝ

こへ入こゝろあめさきをけんでかりそれば沢本
を志げ〜さく〜げ名勢ふぶといふあべき
やうあ〜されば二十よさがどうこまく〜や
波をさ〜てひさこりぬぐうめんの浦ちく
浦〜はぐいく波うくしかんど在あけぐう
めんども山よ〜を見るよりをうもく〜あひづ
けるうかまがてぐよ赤谷よ大をうけくぐん
ごさいうをとりこゝ時ゆこゝをあまそれ
が手波方けぐんざいあんふさういの裏物か
まが中〜一戦あるをよがぐ。岩鳥原田小

名三原法はかんどを始として太刀物具をさ
いとかを者ふ〜くことぐ〜宅鬼の方へひ
きとりぬおりふ〜。又さてのうちへ者こう
〜。岩鳥七〜左馬柳平ゆ〜左馬をりひあ
りする事ありとて見をそのぐさりかん
どこよさこりあひさひとひかり〜ゆかれと
ぐんごの敵ふあさまこまくこれ〜をみか富
岩の城へひさふゆくるされどもこゝ中ゆこ宅藤
兵衛伊八郎兵衛弁河九兵衛まゝ本勢左馬佐
さ小左馬ふて云〜者は多ゆ人ゆあとり

とぐまりくあ〜かい〜ぐ家ことけとらいどんを
てらげ〜くまぐ〜ひ〜へさぞ〜へを〜といさ
ひまどくあいどんのかげ〜をかれが前ちん
くへさんとそれぐる。後ぢんと〜まげかへ執を
をて。部従へをを〜げ〜てまれぐちふ
とゆけそれが太刀とる者へ力をとられゆを
とる者へ矢をし〜げ。豆ぐるどるへとぐ
くてうむうざよく海〜うちをて〜か〜
ぐ〜いのち〜めつて。とうぐ〜へをそおちふ
なる。さてを大勝け〜そつを中よ。三宅并

河。但。書本。佐々さへ海ことぐまつて五人一心よ
同〜てよをとくるとうう二十よ人多の下ふ
ぢさ上を。大勢。いを遅ち〜ひ。猛勇あり〜
その鞭へ〜ぐひちくかきこへくるぢりとへ
いへがもげふ大勝の吉利ふ丹ぢんご左右を
とりこ。ぐりみよりぐをあれが冬脱のひ
まをあ〜げ〜てお〜いふ五人共よ。一き
けてうむうふあ〜けうく。空死のをてそあ
れれかまを大将ゆう〜うんけていのまぐ〜げ〜
とうへふ後りつ〜ぐ。ぶようじんけとをろふ。ふ

とまつぶせいありひ切る所だ〳〵。一萬よ
人をゝよせられがぶ者り氏時小勝利をう
べゝとゝ見へざりゝ

唐津城勢富田城攻事
付富田城を徒黨等攻事

さるなとふぐうん人ども其日ハ雨ふりわひ
よみかたゝ。ゝ。さゝ夕日ゝ。ゝ。ゝ富岡へハ
進てをゆゞみかゝ本渡よ陳ゝりぬさて
その日富岡へさて籠人數まゞ岡鴻次郎
左衛門同くゝ左衛門原田伊豫ゝる大竹か

兵衛稲田平右衛門淺井ト菴ニ宅菴澤木
七郎兵衛鴻田十郎左衛門そゝゝう頭よハ開
若右衛門岡枝清左衛門柔田孫五左衛門小笠原
祝助ゝゝ。ゝ。ゝ。

ありべき城とハ見へぞりける。さるるうゝ人がも
うちよりてハ見せんざ。ゆくうちとて
おきていせんをかゝ。れとりうゝ川ハ軍物
よ。ゆかうのなど。をハ見をおきぬいまごもくゝび
やうゝうのさあぬまに。いざや富岡の城へ押よせ
て。あぐ一攻よせあをゝ。あま茅中をきこゞへ
て。そこをを京ハ祝ゝ物よりゝんと。そて
うゝをゝ議定して。同き十八日。吉利ふ
冊の屋ゝむゝ。一万よきゝゝる。富岡までハ
よ。ゞゞて。城より一里ゞゞて。空男と

いひゝ。ゝまで。人数をこゝうハをゝいぶ源
件の白むゝ白のゞり。正数千ゝ。ゝ
祝人数ぞゝへをゝ。ゝりゝれが富岡ハ城
より一里ゞゞて。ゝ見へるていゝ。ゝそて二三
万をゝらんとこそ見へゝりゝる。ゝ富岡へよ
せんとありゝ。ゝ人数ハていをゝのみせる。
など。ゝゝうハひさふゝる。ゝるゝ伝て富岡
籠城ハ人ゝを不審をゝ。ゝるめて夜
ぐゝふやせんぐゝ。用心をゝそゝろゝ。
さゝるゝゝて。ゝ五月十九日。ゝより吉利

ふ冊の屏ものこみをつれ城へをくりける。
時をどつとりみこて。城ををくりとをあけ
をでも城門ひらのてつもうもきまあんを
どうれがれが集蠻ばどきよをてどもこう
ぎこをくりるごとく。二百余人。片時ぬ
あいごようこをこりさてう代者ども解て色を
うかりでとるをありひろん強て城ををあげして。
そのまゝぢんをひさたる城門代人〳〵出一戦よ
かをふいよ〳〵けんごようぢんとをうるなよ
ぬ郎時貞ぐうん原を近付ちゝめて回かなの

小城のんどをぶこれなの人数ゆてをあをとさ
むこそ盆をとう〳〵孫注〳〵これをあんをよ。
指ぶてをを用意をぶ。只うう〳〵とをえんけ
て。味方ゆ〳〵けまはけをを。歌よ憂利を意
させられて度い勝負浮沈代合戦の代ぶそう
ぶあををんと始ををを。一万二千代ちゝたう
付かちぶてをいぶて用意して同き二十
一日まぶ東雲をひうぶるゆ又富岡をとり
うごを。一度よ鯢波地をうごう。奥ぶん色
ちく押よをて。死ちゝく昇天生ていぶとこ

をゝれ城をありとゝ。あのが家なれ祢んぎ者をと
あゝゝて作あだゝを作きかぐ。うゝる者
をべかゝこゝへ〳〵あゝるゝあり。ひ切るゝたゝこ
ゑきかれば城門れ人〳〵を者ぐさうゝくぐ
きこゝへゝりかゝてこゝうれ角ゝゝゝいゝく
きうゝよりみゝてれぐこれ九をべをゝ
ゝり。二れ九まぐゝこゝ入ゝるゝまゝゝよ城ゝ
浮雲事。氷潤をゝむゝよゝゝあゝぐゝれども城
門れ人〳〵さいごゝちゝゝきうゝゝりゝ。花をゝ
節ゝよゝ〳〵ゝそひゝ上下一同一心ゝゝゝ九きん

ごゝよゝりゝ。ぐ〳〵ぐゝ。三宅友藤ゝのゝうい
ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぐゝゝ矢ゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あれ〳〵ぞ。むかし〳〵陳をひさかたの彼寺
澤の頼のさふ〳〵ひけかんどの子のちぎりく
をば城ゆくぞ雪ざくる浮雲うり〳〵事
どもかりこそはハ一揆の門ぞ〳〵そてをかか
ゐ〳〵とやまりひろん城をとをあぶ空郎ハか
勢ハとうをひさきまく鴻原ハ津へこ
そゆりくるそて又そ海のぐうんくとぐく
うづ〳〵よとり勢よようぐいかまへ用心して
こう居よりくれ
鴻原天蓋ハ徒黨号為退治諸勢押向事

付一揆ハ郷人号原ハ城へ搦籠人数を記事
斯沙汰よりよ一使をして板倉内膳石谷十郎兵
人号詰をあて肥前鴻原へ下向あるその意
趣ハ鴻ハぐう人号一揆のありひをあとを
ぐ〳〵不守松倉寺澤ハ厚歓恣政ハうふん
ゐて事を吉利ハ冊ハぎをかゐべ〳〵ちう
べあ使發向をとうハ原門ぞ〳〵をれきうが
さうそく踏沒へいぐひりひ石趣をてんへそ
〳〵をんそのあもむさふきぐひくその沙汰よ
あよぐんと原とき心よあもをれくれが汐路を

あめをいそぐ〳〵して心ぞかよてこらまこゝる。
されどもこゝうの川ぶね〳〵上使へ指むうふまで
をゆくかゝることをぢやさしてひとへよ一き
の川ゆとあ所にせりゆるゆ俗て上使肥
前鴻原松倉ゞ城へちやくぢんありかゝて鎮西
の押めぶをを豊後府内よ番所ある。牧野伝
右衛門松平神三郎林丹波守そのころ長崎ゆ
ゆ護代ゆり〳〵。馬場三郎左衛門ものゝ駿
艇鞭棹ゆゝ高来の城へよりあ所ありまりゆや
う使ゆ〳〵ものを義知〳〵てらげまこをより合

せんざあるゆゝかとこゝゆよ在江戸ゆり〳〵鴻
原の所守松倉長門ゆ勝家あま茅の領ゆ。寺
沢兵庫頭忠高あ人を給知の一揆募重
ゆ上ゆよ〳〵。御服給ゆゝ。夜ゆを見よ江
いぐをの〳〵ゆ中へ逃城せ〳〵むゆて上使
の評定よゆかゝていとをゆくべきゆあ〳〵ぎれ
ぐまぐるんゆの軍勢をます移きよを。一揆
の原ゆ。けいぐゆ乃ていをゆのんをばて
うの原ゆ〳〵こゝうへゆうさんかどうせざ
ゆゝんよ〳〵それゆをゆ。ゆ業

自得果をまねきぬべきことなどちらちらかの。こころ
ぶり。一々より運様をとりくべしとを
ぬ〳〵ぎぢう一同してうまんごくぬ人数をこ
そかまゝうれ〻るまゝ。同西ぬすかまゝ鍋島
人数をつゐ連鴻原へ三番つぢんまこべしといひ
ぬるゝ。又きんつとかれば。籠後ゐ城ぬ軍勢
をもきりと松倉が城へお陳あるべしと使を
してゐ〳〵びぬ鴻あまゐまへをもち沢小路ぢう
つまあくもちゆくびさうふあ〳〵ざれ。細川
越中ゐ忠利ぬ人数をあまゐまへいぢさるべ

きとちうきんし。ぬもむとさをさりそく
江戸へ駿馬をそて。をりくさうめいぬうま
ぬり。普る意ををとをんぢんとの言よとをう
きこへ〻る。きうるつる肥前殿道寺ぬ城ゐ。鍋
鴻伝州ぬ武蔵ぬ江戸さんきんお伝うちやく
男紀伊ゐ元義次男甲斐ゐ直澄。一万五千
よ人引卒し。同ぬ鴻原へをりうあるそ
籠後久留米ぬ城ゐ。玄番を豊氏を在
江戸ありしるあまゐば子息兵部大丈忠雲。
八千余人きるぐへく。鴻原へそお陳ある同

西柳川の城を立花飛弾守宗茂政是を在江
戸ゆりくまゞ猶子左近忠義五千余人を引
率し〳〵あくの城へ向うあるさて又肥後
の軍勢は細川越中守忠利父子ともふこれ
又江戸在勤ゆ依て家臣長岡佐渡守長
頼毋依者人一万余人ひさはたまくあま者
をもてへ陣取かとゝ為ふあま者の領守
寺沢兵庫頭忠高は唐城〳〵へ城して在
西勢をかゞゝふきべのこりもくあくとんぢん〳〵
とゝをなり竜城せ〳〵ひるゆへ向う八百余人

とひさ〳〵もくあま者をもてへ船と同
者の軍勢ゆ牧野傳蔵松平神三郎
林毋波守ふこんとゝきこへ〳〵あくゆ細川越
中守忠利ちくあん肥後守光利いまゝ初
宗の始より武蔵御門ちくとゆ在位ゆて
三十八宗ときこへ〳〵肥後の人数あ
ま者うりくりゆ〳〵岩手御門
脇をひとゝひ立ゆ肥後の人
もてゝ一万ゆきを引率し〳〵十二月
六日ゆ是をあま者をもてへ陣ある治る

内よりあま者中へとうりこむ。ひらの〳〵と注へ
きてかの人〳〵とや思慮仕りける和泉とり
あへず。小船どもよりとりあつめて鴻原
をゆびさしてとり。一番のかりとさこへ入る。
さうるゆ細川は先後は軍勢おのびより寄
沢あま勢ゆく。あま者中を尺地をのこ後
ゆいそうせ〳〵ときこへ〳〵ぐとよりきて蒲
きそりれがそう一人を若ざりくるさるよ
俗く細川光利なあま者注〳〵ぐあり〳〵とて寄
沢めんどもひひさりて。手を空〳〵て。中

川庭は津へめんどもを〳〵入き鴻原か
勢は入りくとのそこ注きこへ入り。さて
又あま者上使三人なる馬は浦へを〳〵とる
つを板〳〵石岩あ人よりとつを注きこへ
〳〵さてそ鴻原あま者あ和は一揆等あ
鴻は所ちあ〳〵びよりん西は諸軍勢者利ゆ
毋誅俊よりは川うは〳〵より〳〵きて宮郎を始
一揆は顕貴等者日きよりおで注こさはま〳〵きよ
きよりめんどもをめ〳〵ちきは勝利角をとる
まで。されがべあくは部を馬は〳〵〳〵ち〳〵は

城ハむかしより名をなし。城天守より一ぞ
一城ハ外きんぜいハ法式なるゆ侍くかの城
ちかくしていよいよ荊棘ハたくのごとう
とありぬ。されどもようやいちりもむしゆ
ゆゑりぶ山ごりゆ籠かがちんどいさてあき。
天守ハ御お馬ゆりとこたもの。城中ハ板米
鉦藥ばきとびゆ蔵城ゆりひとよりぶそ
よへ天帝を世ゆ勸廣しきんとの籠
城のまぶ勝利をうべき事あるゆ侍ん
中ゆりとてかの古城を。十二月朔日より。十

日の中ゆ城中善請をとられぬくとしを
ゆんじゆ板米よいるまでとりこみる
とぞきこへしかのちハれぶうとしは。
二方ハ海まんくとしてとさくゆ屏風
をとてるごときハけんそかれば船をよす
ぶきをうをかきをりゆりあきハあくて
かり。二方ハ又きしたくそびぶちその下ハ
ぬきかり。城ハそうぶハゆり。百余町をを
らんそのるゆ數千ハせいきをとてかべ
ぶ風よひるぶ角ゆくめぐくけしきを。

秋は野原をむすびて
築城をなくはせさせうまをきりさうりざ
をひいくまもちうけられがおおをあ勢あり
とそをとやをとく蔵をべきとハ見へざうり
ゑり城中あはとうきるうは名うんうら二万
余人をハ働弱ゑ書はは閉もう一万六千
余都合三万六千余人とぞきこゑ原は城
掘大将ハ伴はとハを交領さうせあま者
冨郎太夫時員と号して年九ハ三うう用
もとあるハ者どもハ芦塚忠右

清ハ源頼信九清ハ赤星三郎頼基博沢
命ハ津家ハ同く右京毛利平九清ハ林七
九右清ハ松竹部右清ハ三宅次郎右清ハ久田
七郎右清ハ桑村休澤打田太公忠は十三
人ハ竜城はらうん衆とて諸民家用し
時員同座よはくあるく伽慰の者とぞき
うべるうて城中ハちロは大将ハ山田右
門作大浦冨郎兵衛働民二千余人まうぐ
ゑく平九は持口うめうり二は九猛農は
頭首ハ千束ハ旨墓ハ上総助右清ハ同三平

戸鴻巣右馬丞人五千二百をとるべくく。
二九をとるべくく。二の九はとり物
をば田澤形部ぐうけとりく。寄農五百で
くめくり。三九を九をば大江源右馬布津村
右衛堂澤對てる北りをる久右馬丞者ども三
千五百を引率し。持口をんごふ十とり
くり。同き九をば九ようとう五百よ人をあつる
は掃部ひさまり大江口をば柳山小濱
千く淨口は津。上津浦村は五う村は者ども
をば大矢野三左澤一千百でくめくり池

扈口小の家徳はお場は者ども六百よめん。
若村右衛本場作左澤ぞひさまり大
田扈口をば深沢右馬五百よ人をうけとり
て持口をとくうかくめくり。はは大矢野松
右澤山右馬丞人よ健民二千よ人あづ
けもつき持口あつうきとこ澤小加勢は
めは深人かりをうて又軍奉行よ小澤監
物入道して休意と号し。是沢姫として。
芦塚忠右衛。松澤右之丞布津村代右馬あま
弟玄札は五人をば軍奉行よ宮りくぐう

中諸事ハ此ほう宮人よりの上ハ徳村ゆこる村ゆこ村
布澤村田澤村澤ゆこ沢ゆこ本場千く倫村上澤浦
下津浦大矢野村ゆうハ村〳〵より日本
民首ハ者どもを二十三人さごめをきのよう
ゆ おいくをひきうゆハ時節よりゆ者ども
うちうちよりハくをとくハ議定をゆ後よりり二
十三人ハぶんかりんとどりくる浦ひ番
ゆ池田信龍寄ゆハ津龍左澤墨千く倫作龍
澤ゆ者どもとどさくめくる夜まりりハぶん
ゆ愚冊後ゆ義安松中右京進之時式

あ人ハ古老ハてぐ〳〵めんとどりくる城中ハ
てんちうゆ二千よりうとさこへ〳〵ゆの摂
大将ゆ柳瀬義右澤ゆ康ゆ本右馬助時枝筆人
ゆとて式三人ハ行ゆを六十猛強ハ古士ゆる
日夜朝暮ゆ右をめぐり持ゆゆぐんゆきやうよ
てハちうをこうゆ攻ゆる。そてもこぐら
ゆ高白檀八楠浦孫兵澤ゆ人ゆり摂を行
ゆハ蟻川龍京泰寄意斬かくのぐくれく
ハ持ゆ面〳〵ぐをゆ〳〵式家をうり〳〵式
勇をくゆりちうへゆき仕合どもゆゆるまゆ。

あ〜ゝ〜のきさ次第あり

十二月廿日原城一番攻の事

きうる月松〜〜長門守猪家をさきをこうて

鍋島紀州元義同甲州直澄真花左近忠義

毛利毛部太史忠重をめ〜めんぞをひき率

ら〜の城へなを〜上使板〜石谷

の城の御河内守をもをはまり〜て石谷

城を見張へへあんかの遠の次第あり是いや

きさ大うのうべし〜ぶう人ぶ〜とまりひあか

ぶり。そこ所よりの見張ともまげひいぶん

をとり張ひせもべきていをを見せ〜めぶをう

のりあ所めるる勢かれが。一和よりんごいよ

をめ〜じ。あぶんうきんの扱陀目前あり。ぶい

〜ともべきなどかあ〜ぶ諸を不合きく〜ありぶう

と板〜。石谷ぎだうゆ〜ものぶひいぶん

をぶ居らきこりるきてうべきゆ〜ゆ〜ぶれば

ゆをの軍勢かぶけて所ちう。大石大筋

ゆ〜。日ぶ遠うもちられども城中の御門ぶう

かの〜〜〜〜の〜の城ていをあ〜。さ〜〜ゆ事をを

をぶりりる。きうるをを〜ゆよ。松〜〜長州の後

陣をのり〳〵。立花危近。ちかづく多部大まさきて
をのぞこ。敵城まぢかく志ようりを付ひとへ
てかたうどくめどうりゆく〳〵もの〳〵そう
いんをくれる。さるなどは十二月十九日に
うすのるふ。板〳〵石〳〵諸将おむかく〳〵のま
ぬなくて鳥兎をもつ〳〵いかまぐと
てうちべきぞ。ま付と夜諸勢よ時れこゑを
あげさを夜ひけてい。をあ〳〵城中に
ぞうぐいをうぐひうんそれをもおそれど強
敵がさうぐよ〳〵。寄手小勢ありとも。

さうむ〳〵に籠城かれがんじものいうなとも
とてをとあなとさうん事掌握ありと宣へば
諸将にめん〳〵一同ゆて。そ日に暮ゆもあり
くれば志よ軍勢夜ひけていよそ〳〵ぜあ。
ぞきにうへをあぞ〳〵まば城中にそうらを同
時を合せ〳〵志ぬまりかへつて居〳〵りくるちる
万板〳〵内腑のさまふはは〳〵居ていはんを
の〳〵。一ひとあはんとのぎぞうゆく〳〵軍にはい
ざいをぞ〳〵板〳〵くるまぢ鍋潟に人ぞ。
而松山を察〳〵をぞきこへをあぞさをば

城中ハ太平ハ面の多へうちいで
ゐんたう〳〵ハ南北大手ハ要隙かるべ〳〵ぞ対
立見人じゐハたゞ山まり迎てをゝよせ〳〵先
多ハ時をいとゐを松島よりて一度よりゞ戦と
をあい〳〵ゐ面とひゐをこざ戦とも迎多かゝめ
多ゐ〳〵あり上ゐ一ゝりゐ家捕と板〳〵
奉膳指島ゐ伯く十二月廿日〳〵ハ朝よ
り鍋潟人じゐ一万三千余ゐとより松島ハ
うゐれゐ面のゐ松山下ゐ〳〵よ寄る。
時をゞりとたりかゞ。かゐ松山よひ〳〵と

ゐ面ゐあゞりをうハ立をくのゞりゞもかゐゞり
ゐ〳〵をあをゐ寄でもあゞりゐれゞもハ松
山とゐハ遠ゐんとゐ〳〵ゐとゐ寄ゐ結ゐりゐゐ
狭山ゐ〳〵人数をゐるゐ鍋潟ゐき切
所の山ゐ〳〵ゐれゐ城中ハ前ゞ〳〵ゐ金
をゞ泊〳〵きゐ〳〵ゐれゐ横矢ゐ見
ゐ〳〵。弓てゐゐゐ事篠衝雨ゐ
をゐ〳〵ゐ〳〵をの鍋潟大人数指島ハ山
をゞ寄ゐれゞもハ鉦前ゐゐ〳〵ゐ空家器
ゐゐ〳〵ゐ見人ゐれゐ義直澄是をゐ〳〵口

かぐらや思ひもよらぬことゝもとこそハ
ひき入れ給ひて又立花人数なを丑の刻より
ゆびをゝ人数をいぐ〜たゝりきり
ゝまのぐ夜よまぎれ持ぐてうぐてこり持
て。おなじ時刻をまち〜ゝなを鍋島人じゝ
ゝ時をこゝとひら〜く。左近忠義を勢五
千余騎を勇りこゝて。櫓作を把をぢき
かぐら。あゝ大をへ雲霞ぐ〜をあゝをて
只一のりをゝ。寄をのあんよ相
遠して。城中ゝ〜かひく〜寄〜

ことゝゝれば持口切よりこゝ引。三ゝ地ゝ大
将ゝ。大沢布津村。出張。かぐ三千五百騎引
まゝり。寄をゝ〜ゝゝゝ。ゝ多ゝれば寄を
多勢ゝ人〜をゝ遠きゝて。ちうゝ〜ゝ
をゝ。近付敵をぐ大石あゝをりゝ
なゝきゝゝんぐ。うちかけゝれば勢錆ゝて
きかぐ。て作ゝをゝをみぐんゝうちぐ
れ〜ゝ。ゝゝ城中の射をゝ。
ゝゝ射ゝる。二方ゝ城ゝ
びをちかゝゝ。ゝ友左具ゝ

手負死をいつる者そくだくあり。是あるを志
死まぐるあり。然る間いのちへをあ奇をとゞめり長刀
ゆくゝ行きちゝ奇手の人数心〻ゆくへ
いさめども。ごう勢ハ強くゝ。さうを勇ミ来
其忠義をかくてハ勝利あゝゝとやあもりれ
りんそのまゝ陣をひきうのぬきち自立死左近
手ようち死のさゝふゝひまり立死三左衛門。
十時右衛門佐田清左衛門坂邊源郎左衛門猿部
左衛門車田三郎左衛門園田久左衛門小野掃部
是等をさきとゝして人持物頭廿八人討

死をとゝ手負ハ侍六十九人。ざうひやう
加ハ是討死手負。三百八十余人とぞきこえ
ゝ。鍋鴻手よハ強戦よおよびむたうべき
さゝひどもハ者ゝハ損ぜび。鉄矢の手負
ハ者ゝりりさゝ是軽ども是を二百余
人討死をとゞきこゆ。ちゝ方くゝ。
上使よ行きゝ武士ども三十四人討死を松
ゝ長州のをあ手きびをかう物る者
者ゝとゞきこえりゝ。ち自城中よハ死人を
一人をゝ手負ハ如くゝありとゝや是軍

る。勢ひ多ゆゑ、こゝに兵をとりこめ、
ひ。尚遠より係るとゝいへども、時の運にて、
あかがち城とのゝるべきぞとてのごゝいあり
所潮かくとなもべき風勢を城中ひ聞だ。
見くらり勢ぞこゝにてうさんとゝ。せんぞ
らんと。試攻の意趣ときこへくまばとゝり
ちぎりく。月へくゝり

鴻原記巻中

鴻原記巻下目録

一 元日原ひ城二番攻ひ事
一 松平伊豆守信綱石田尤門氏鎖鴻原下向事
　 并隣国より加勢ひ事
一 二月廿一日吉利与丹笘討ゝ事
一 同月廿七日吉利与丹落城ひ事
一 山面右衛門作方死を出得二生を事
一 寄手の人数帰陣之事
　 付 松倉兄弟流刑之事

鴻原記巻下

元貞原城二番攻之事

かくて光治矢代どくに。極月二十九日のありよ
りるかくのごとく。城内天守代御門櫓代して
軍伊豆守伝鋼戸田左門氏継かうの御門下
知と義くに有馬へ下向ときこへしげまさで
著船のくに目とふうげんを抜て石谷三郎治
ひ。伊達の寄手諸将おむりくけさまりかな
肥前有馬代一揆ども退治代あお自殺し
ぬひひ〜さこ城よかうの伝聞さうる

さるゝ象ゆさてさめてさんぬる廿日城攻をて
ぞんじゝるゆゑの門逆鱗と者しゝり。
されば城ごとの城攻ゆゑ勢法ごうざい
ゆゑの門ゝ。寄手ゆゑ城ゆゑ世ゆ人口
をさうへゝ。ゆゑ愚案をいさゝ山家
ゆ城攻ハ古来ゆ例ゆゑ調ハ兵
の徒黨悪名數万の義城ゆ味方を敵ゆ射
揚ゆゝ。かゝ君近ゆゑ諸かこひゝ。農民と
ゆりへゝ。こゝ古今珍事ゆ城攻ゆゑ。ゆゑ
ども城ゆゑハ擂道ゆゑ後詰ゆ城ゆ

一撰ゆゑ勢ゆゑ殺をゝ。ゆゑ。ゆゑ
ゆ屋敷ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ味方ハ敵ゆ射ゆゑ
者千ゆ徳氏と調擂道ゆゑ自由ゆゑ
ゆごゝゆ寡をゝ。ゆゑ城をゝ
ひゝ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
ひゝ。ゆゑ。諸手一同ゆゑ大ゆゑ。一向ゆゑ
とゝ。ゆゑ。ゆゑ城ゆゑ射ゆゑ鉄箭ゆゑ殺那ゆゑ
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
源ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
をゝ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ

とゞまべきそれより日ゞをおくりのゝ近日伝綱
ともをゝでゝり他勢をとりのゝく城をせめをとさ
ゝよりおくゝなかゝゝ敵ゝ不ゝいゝるまゝゝゝ
のきゝうゝふゝりゝゆゝきゝゝゝかゝらんゝど後日ゝ悔を
いゝゝゝせんゝ只ゝゝよかゝゝよゝ勢ゝゝゝきゝうゝ一揆を
せめをとゝゝらちあきをべやゝと議定ゝゝてゝあゝゝゝ
まゝゝ年ゝゝゝゝゝゝめゝ敵ゝゝ噂ゝ方ゝゝ祝心不意ゝ
時のまゝが習年ゝ元日ゝゝゝ揔ゝゝあゝゝんゝとゝゝゝゝゝめゝ
まゝゝゝる諸将ゝ面ゝゝゝ様議ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝのゝゝ用意ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

げ城中にこうどもはしり〜をさ〜はせまく。儲
えんに負だ〜。一千ばかりのうちいでゆき
てかちうをとりりく。降雨のごとくうち
かけられば。をさをさきよせもむとそれども。討死を
負はしりうちの。一千余人時に召よせうて
なれば心ひくをもて。久留米をん
軍勢をぐゆ。さうにかうそをとどまるか。
さん〜に敗北を城中に負はしりをいとき
かひおぜうじて。夜討にあうぬきびりう優
をさ〜人をに瞻夜をのこめ〜ゆと。逃

言をいて退うちをとおぐ〜をきありさうをかの
つを寿多殘勢是を見て遁不及ものるに城
のりかかぐ〜おぐ〜に。をを〜をさぐ〜ハ云ありさるかぐよ
後陣に軍勢へうつ〜をさぐめ〜元三に別腹
ものりられば諸手一同に大手に城戸よりを
よせて。時をどりとをたりかをぐをて作をぐを
作をかを〜。をを〜みををんでををい〜
までよををきられども。瞻中大手に負勢ども。一
人ををりぐをぐををりゆををりかを長口
大石大木をりをり〜。近付ををて軍勢

をみちんとおもふまてとうちとられば我ハてゝ
うとれ要ハおのゝ長刀大石まとうてる者ゝく
千人とゝかゞをとゝゝゝとうるとゝ為ゝ城中
よハ四郎をはじめ老士どもこゝまかけまゐり
ざい城ゝくゝまてゝ人数ハ多てまけとゝゝ
只一方よりかゝてみゝくゝゝ用意ハゝ山
節おり山大夫野う加勢ゝ人数をゝゝゝへ
よゝくゝ下知をおゝ助成ゝ勢をもゝゝ
大手ゝ持ゝ五千余人ゝゝうゝゝ家をせん
ゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝ軍兵をゝ

かゝゝんゝゝゝゝをおとんゝ討死家ゝゝ思
ゝくゝ為てゝ城ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ合力勢ハ一倍ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ軍兵を
逃ゝゝとひさうひてゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ寄をゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ勇ゝ折ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ内腦ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ一陣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ不進ゝ士卒を勇めんと下知ゝゝ

ゑこ一ぱいよ城中ゝりめてけるゝゆゝゝゝゝ
くゆゝゝゝゝ

源忠国家頼より討死せしもの九十余人。
手負せしもの百七十五人。ざう兵ともより
うち死手負千百余人。鶴鴻家頼せし人々
より大頭物頭さつ〳〵ひぐんの者ども三百八十
三人討死と手負せしもの百より人。雑兵
かずこれうち死手負二千五百より人なり。松
〳〵長州より来より。討死せしもの十七人。
手負せしもの〳〵ひ十九人。さ系めがる雑
人ともより。討死手負二百廿七人。同松〳〵右
近より法いくさをせり。諸軍人廿
三人討死と。ひ系方〳〵国〳〵より。使より つき
一軍使のもの〳〵ひ。三十より人。討死と。同
手負せし者ども五十より人ときこゑ拾じて
さて自討死手負をせしもの。三千九百廿八
人さてさうもるさられうの前代より例なり。さて
来代より。こかう一と。諸人口ぞ合ゑる。城中
一撰せし手負死人ばかり九十より人ときこへけ
ばかりとおもあ〳〵ぐいう稼てんまれさよりと
ぞ。当ゆの軍ハ云あへるされば城中せ負けだる
かくるもてその負勢せ憂をうかがひく。高陰

かおのんで夜討せばやとて用意せしめ
らんと寄ざりしるこそせめて用事の至
こ物の毎暮夜中よりおよび西天腦藏をと
あてしくこそ禅代東寺かりきふ
ちぎとそこもあるよりあり

松平伊豆守信綱戸田尤門氏鍵有同下向事
付隼人の加勢代事

さるかたに上使代人くかくてい無人かりとて
その翌日二ケ日肥後代大守筑前代大守あ
ゆ代人数をもいそぎもくださり

訳はうかがひ後の御用代松平伊豆守
信綱戸田尤門氏鍵着船ありく彼軍法を
御法んじてまことにはは無勢かりいよく
きりと面ゆりの人数いぞさるべきのむ御
かさうくちりちんるこそくれば肥後代大ちれみん
数のくちりようういのうかまば細川肥後守
忠利二万三千を引率し正月三日代曉天
より肥後西川尻代津をお船し同きさりの
晩景より肥前西洲川代浦へ着船をとの代城よ
りそこ方より一里ばかりそこ後かり細川人数

もて夜ハ洲川より野陸をかけかゞりをあまた
さし為よりて出ばしてきありさまを城
中のさゝう遠見しいとぐけうくをあまたゝん
と寄手ハ老士ハ云あり志ゝ為て翌日已ハ
刻より人数をゝ馬へをゝいまゝく城よりいぬ
いの山をへ陣をとりくるうて原ハ城大手ハさき
手ハ松ゝ長門ち勝家の間ゝくより志よゝゝあて
人数を討をあるいハ行きりそ
長陣ハ働さ不如意のまゝばの市手へ
ありと大手をと上義ゝあゞゝんと御目代

ゆ志きりゆ詐俗ゝくれば多ゝ細川肥
後守ハそハ大軍のまゝばとて志ゝかりち大を
をひさゝゝされ細川光利大手ハさきを
めぞ仕寄らをゝくるかゝりくるこゝ為ゝ幸沢
善庫頭忠高をあまた別義のきゝ俗ゝく
ゝ志をゝ馬へ陣ある篠前ハち讃ゝ面右衛
門祝忠之人数を正月中旬ゝ忠之在江戸
ゝりそれが合和ゝ面甲斐ち間市正一万八
千ゝ人引率しゝゝゝ馬ハ婚へゝ行ゝうゝある
鴻津人数を五六千鴻津下野大将ぶん

あるくの三馬は海へとて一海ゆくて原は岩う
強敵はしも上杉謙信在江戸あり九州ゆ
諸大名のまを河いよまを河くを原は城へ
ぞとりかうあるまが細川越中ち忠利ゴ西
右衛門佐忠之鍋島信濃ち勝茂ゴ高麗
豊氏立花飛弾ち義政小笠原は一當ゴ有
馬左右衛門佐ゴ野日向ち伊達ゴ河内を
義て夜ゴ目ゆ法いぐ肥前ゴ馬は浦
屋ちく陣あるそうじてよりてての陣ゴこ
敵城より東西北をとりまち。をく

陣をゴ居らをくるまが大ゴ東は口細
川越中ち忠利ゴ次立花飛弾ち義政ゴを
次松ち長門ち勝茂ゴ次鍋島信濃ち勝茂ゴ次小笠原は一
當ゴち長ゴ馬左右衛門佐ゴ次寺沢兵庫
頭忠高西はちまてをバ西右衛門佐忠之持は
むひぢんをのくかくはゴくあり野日州
なるるゆちさんあるそれが陣はあきあゴ
ちくゴ後陣は山ゴひへうり鴻巣人数八肥
後勢は陣屋は城ゴりきはちまて。

是をかなくひろへ給りさて御国代伊豆
信綱をとらせ給ひ使ひ人〳〵を立給ひ
〳〵南陸奥をくまなく高山をよりあの
なのらんをそ尋ら給ひてしてしてて
此御人数八十二万五千ばかりとぞきこ
ゆ〳〵かくて在陸奥諸将行きを御国代為
指揮をまりるよ信〳〵しでおは城のりを
ちさんと所存ば将衆をあ〳〵めぐらの事ま
かせよかゝれば名誉ば老若會陸して謀
智をあ〳〵る事をかゝりしかる日数を

をくらるあるとこ伊豆ちめん〳〵持ば
諸将よむりく宣ば信綱いまゝ軍こう也
といへども御国代知を歎くまかりむ
りくはよりものくあをんむりよる秋
りとも兵信綱の任せ〳〵べ〳〵されば
きづう所存ばもきと意ばひとへよ
同意あるよ信〳〵城のり停止せ〳〵むその意
遂とそを別儀かの〳〵一揆ば御〳〵数万
おすびより籠ぞで兵を家〳〵てかの
をもらぬるとうら〳〵是御りあのの軍よ

をあるぶ方てかもうまいぶ農ぶ角そあ
らばこそそれよ名をへしさつひともを
をやよりくうさせんをふてさりく
勝事ありぶくぶ敵ぶ砂糖を見るう
是古沢の城とハ云ぶ傳ぶ和んあり
少へ物あさまよあい見へられぶ城中繁ん
いまれやよをとどぶ城ぶあよ一方をを
るよ利ありときく家をうう人とあ
ひあがどるをを物がへりく不見ぶあり
ありへあぶくさくを物りまりて喜利ら

冊ぶ角ぶ方ぶを一人を数ぶ沒ぶあう畫
ぶをあよをくしあり一意ぶ拔りりくその
むひあり諸をもあもおそこりのをうきち
やうじあるべしをむへさ時節ぶよあく
へ令觸をべしをれぶとそ見をづしあん
より竹ぶをぶをぶを見をつまをもをあつき山柳
襲ぶをゆるくとうらへ見てりをうぶ
くめをうべし伝綱をてりをうをうをを
とて長濤より唐船を五をうまを神をよを
あんだ人よ大石夫矢をうををををををいを

ていあつぶんにしてぞおうてくるさくるる諸
将行まを御国代はさうづよまう多城ぞん
まるのよに一重三重の大ざくをぬりまう。
さうでたさき山せいろう行あぞてれ拓をと
つまを高へものく敵城へちりつくひとへよ鉄
鉋どくめばりあり海をちりハ肥後筑前は
ぬるより五十よさうは番船をいざさを海
上よりを大石火矢大てれたうをとをきま
をめくこうろうひとれさうまばりよ城中
は一揆ぬをあまりよ多ちぞ記てれたうよ。

拓石ありどくやありひきん数千輙の民屋を
とくゆ地をかり土蔵のごとくようらへて
あとへば狐狸は拓石はごとく。かなどもをんは民
屋を夫は用ゆ一のや志川ふぬりやようハ
ちうりくるむうりう竜城ぞ。とうへども。
中朝よおいくちんじ。ありくる竜城ありいう
さまよあをは城はうらゆようづいはかまの諸す
石塔よいうるまで農人原の智ぞくよいを
りひりのきうりのうばば諸人不審をひく
うば古雑をひくよ例ありいうさまのゆを竜

城は當惑類よりまさきくれ古老は武士はるこよ
ゆとくくり合まるる

二月廿一日吉利与冊番衆討ち初一事
かくて城中はらうらら今までい鎮西の諸大
名のこうどくのあくよりもとれいまやもあん今
やのくんとまちて かどもかの大ざくよきと
失し。さてハ志賀のり停ぶして糧書は攻
ふおよびぬと城中は冬ぐいよくく心を
ひとまとるかくて光信ふるなどよまず陽を移
如月ようもまもちぎぬかくしかとこ為ちの卯時員

城中持は民首を近付ふ城はていくくく
ひくくくとくんぎかりやうもてあかは
城のりよ行をぶしてさもぶべき議定をとく
め兵粮ぶあよ志と見べうりかかぶ上ハ寄ち
大軍のりとているづくよ目をおりかが数
は者どもむのくく飢死せるす多日をうつ
さうぶこうと後詰をるのむのをあくぶりう
ぎくよ竜城も見くとのくくも報あ行さて
ハ数日をうれさ落亡を竜城をもや兵
粮を絶よおよぶんとをまるふをちまんは者

どもいくさぶゝの鐵砲さんよりのいまゝご勢力は
強る中まいふゝとゝくさくれ長いよむつぶぎよ
くさんは鎗負かゝでゝ身方はつまうんありう
ゝと思ふものゝいうるてぶてゝよつまよ
けいまゝまゝくゝ美賢をとゝひろれば皆
頭首等はざりとゝ同じくるゝ中う
ゝこれは体意ゝ後やう時負は言越りけも
かりされば武家は軍を去年如冬はみぎさ
つゝより永陣かまゝば畫夜はきびうひよゝ上下
ともかみが浮生かゝきゝゝんをかん

かゝくゝとうゝ夜うちをいづゝ城中は者
どもかゝとゝきゝを付員後さまよさゝをゝん寄
をよ失あゝぶゝ又いうるゝぶゝそゝありやさん
愚老は郭慮かゝとゝをかゝくはぎゝゝ
と同じゝさてようちはひうでうりゝくか
ゝゝうるゝゝ後よ時負思案よいちゝ夜討
は儀大をよりいゝこゝさんは細川人數をちげく
ゝうりをゝきゝゝびゝきてうちをかまゝぶぶゝ
をふ人數をそんぶべゝ二万立花持合は
かゝるをびゝゝゝうゝば鍋島寺沢ゝ田ゝをか

人数をひそかにかくしてあかどれ作あぐたてれいさぐんごろともかたをうけさせそうそをおは篇ようさぐめて城中しのりうきれこうへをあぐさせんきうーをしょうちゃうきあるいい寄せ死ぬ者ハ同士うちして最後をしさぐかかりきまへじ。さあーんよおいてなるをその軍兵のきをたゝ移ー陣屋どもよこやうをぬきーくかどかーぐうんのうときよをてどもをんしれるよ逆徒せんすうこがいかゝーバ大をれ手ちぐきき。住寄ども一陣ハまていぬぐんこうまりけゝーかゝーじとあるかるさあゝーバ寄勢ハけるけ根拠鉦鼓うだいこりり大石火矢。大てけどうをみる城中へこりこゝかが見年必ぐよをこうりとそを攻べきてぐそげあゝーバこうとゝいと事をるぐこよかるるれが引庭の者ども是をきゝさそを面数てぐそ庭ていさるまぬ者ハぶうりくるさるるもの〳〵あぐこりよ宝あるけ知云をこと。さて二千人を三組よりけ千百人を芦塚忠義布津村代官鳥居氏あ人よをさぐへるうをもう

田舎前をへぞをしむらるさて又あま法花
ゆ公六百ゆの人おそへて寺沢をへぞをしむ
物又千三百をよ上総三平千〻輪五〻左衛
門人ゆきてごへさうせ渇鴻をへぞをしむらるし
者人ゆ多ゆをしてますが上総三平一〻五百
よ人をへたごへさうせ夫面きらるさをきりを
ゆをひとへゆ夫付し役ゆをへゆ大ぜいろうゆ
をしむらる間くゆ〻輪五郎左衛門〻八百人
をきごへうせ是ゆ一向夜討し行をもろ〻勢
しをごうきこゆ渇鴻ゆ面持ゆ所ゆ寄

をゆりゆゆ一ゆゆをもを城中ゆりゆゆを
ゆ是場をゆく日来を諸人し一ゆ
搦寄うちゆいでゆ〻ゆきごめて武ゆへいでか
むとをゆかををへゆゆ如月廿一
日し夜ゆをだりし武をゆをゆ自刺をゆれぬ
ゆ〻き夜ゆ〻ゆ〻ゆ第ゆ三平ゆ千三百をきごう
へゆく渇鴻をへぞをしむ〻ゆをゆ渇鴻をゆ夜し
仕寄ゆ数千人し者ゆもゆりゆ寄ゆるゆ
ゆをゆゆゆてをきゆをゆ敵ゆをゆをゆゆ
ゆをゆて竹をゆ地大ぜいろうをきてごんゆくゆと

とうどもをくまよせうりゐれぬあびくし
くかけあげり。畫よりかたがへどもあづく
數ことごもあり。是を見て城中は騒堂ども
をつきれうあつて。二万よ人は河
もとゝ一方よりきれこへをあぎゐれた。
ろくぢをたんどりゝてん地をひぐくば
かりありされども濁流あ頼はたそつども數千
人あ合て家とせんどゝたゝきゐれぬ夜
討をうら面よ人討捕ぬいけどりを妙
ゆるあとさこあ濁流あ頼はさつゝひよ

秀鴻宇郎右衛門ゝ石井ゝ高ゝさまあ人討死をし
うりゝくまをあ手負は侍ゝよ人ゝ是輕英
よ手負討死八十よ人とゆへゝるまそあま者
玄礼ハ六百よ人をそへゝ唐澤流へ押よゐん
ごふ仕寄しゝ。行多和どもをひさゝと打破り
中流をうゝ渡けどきけゝそけうけ
つ里。家よ寺沢さきては大將よ。三宅後藤式
面をさゝ付てとゐ夜うちとう流へゝ。喜力
をけとりまけうきふとんどり。折節ゐ合
郎後又ハ組付ども。あをゝゝどとゐひ。

前後をだうどして戰しげくひようりつうる
きりまことにきびしき働ありとうり寡
つるをうどもの死の負はありそれば留りて
門たうを手ともをびぶ家をさいごとせあ〜
うあまりふたりのさとをうらしよ寺沢方れ人を
をぬをざかひくぐてゆのへりをされども三宅義
右衛門物骨を砕死をは時と働それば三宅自
身が長刀めうく吉利与弁れ留だ〜をを三三
人きりぬをを大勢れとうう多沢がごみれ和へ
遮掃とひるいとくのあさ働ありがくがさびしき

振舞ゆうく大将れ藤左衛門とニケ所をきびを
義々りをを組づされ侍よい清山源左衛門池田
新助桂下主殿吉満八左衛門は者を人れ者
どもい皆討死をとびりをりをを負れ主卒
どを共を人とゆのへりをされども負れ吉利与
冊三十め人打とりぬを中三人い生捕うり
とゆのへ。彼三宅義右衛門清与めてれちどよ
くをが今寝めてで雪ぎ〜とさく人と
よ言合つりさて平面右衛門伝忠之れ持ロよい。
忠義代事千百人を引率し一家よどう

と柳寿うりこそ夜忠之持ロ其仕事西ろ上面
監物大将ゆりーが毎夜物ゑの用心ゑ其
者を十よ人城邊よ入ーをさぬとゆのへー
げ。件の忠其物見ども夜討其ろうを告来る。
作多把裏其數千人雲園よ居ろーー士卒
ども多をさたさろぎ注いていでんと住ろー
を監物いりろくー柳闇め目来其をゆへい家が
ととて。後其人數。をかとこ其中へさろーあさを告
利ゑ冊其角だろーを。作多把裏へいまでとて。
大勢其矢けん刀かぎろーさんとり持てきづまり

通てひろへろりゆ。ゆとろり寿ろるとろうどを
ゆひきりする儀民ゆをが千よ人唯一同よ
ゆと寿ろて作多把をもきーひゆろひさ
ひさと打破りゆあさきんできろていり。
大将分をと見よりけ監物ろへ面を抜ーが
かろーを。二家まで。ゆりと注さろづー。こ
家よゆりのぶろ河よ吉利ゑ冊其りりゆて
情歳ゆ面監物頭を左右よ打ぬるをゆゆむ
ゆーくゆりよりるゆろゆ圓田伝右衛門傷よをり
あいーづゆい柳其ひろりゆて武田を見るゆり

を今はかうとゝめ刺ひろん。猛勢一揆共中
より面を掻じと討死寄ぞと思定して。ゞ川と
はいくかつとられば是を見てく和伴人くゝ河
縫殿助菅野勝部勝太夫。新見太郎兵衛
秋山又太夫。ゝゝ兵衛仕寄者。されりと思
がゝき侍ども五六十。一番よどゝ川と渡いてかく
つとられば。うゝを。ゝきさゝうらをかゝ
べきつゝあゝ。ゝしてゝものおれちるゞゝ
ちりくより引よりるゝられども兵衛討死を利与毎
百よ人討ちりぬゝ中生捕十七人。都合

忠之兄弟三人共討死。打ちる一揆百二十三
人とゝゝ者へゝる。さて又忠之家頼討死共
侍よりまゝ。ゞ上面監物。ゝゝ子四郎作兵衛。和伴者
ゞもゝ。新見大郎兵衛尉。ゝ湯秋山又太夫。石橋之
忠兵衛尉市正家臣此等を始として名を知へし侍ども
七八人討死とゝ。ゝ員共侍ハ共五人と中へ。
掠ども兵衛前ゝ。討死ゝ員雑兵共
よゝ。十ゝ人とゝきこゝ。さて又ゝ兵衛討ちる一
揆潟潟寺沢ゝ上面ゝ。ゝび張二百五十八人
ども。二十ゝ人とゝるゝられゝ諸ゝ是より国

をさうまつ。船心きびしくうりとれば。こゝ後ハ
一揆ハ船ハだゝ。こゝうちゆめおざりより

二月廿七日ハ高利ら冊落城之事

一
かゝのかゞとゆめ川ら見めくべきこゝもの〳〵。日数をも
の〳〵くゆるとこゝ後ハ。幽〳〵ぎに一揆落城と。
少へをいふと。敵ハ鴻巣伝流ら勝利ハ。
高利ら冊ら。城をうらへおきゝ。一揆
ハ船川だゝ。城ハ用心をもきびしく
ゝ。常ハ城中ゆりて川ゝをも打れ
ども。はかゞゐ。鴻巣築山より大石大矢ゆや

いゝゝゝん。一揆ハ船川だゝ。はかゞゐ。鴻巣伝流ら勝利ハ
敵ハ敵ハ同をとゞ。ゆゝ見へゆりきれば。ゆゝより
ハて川ゝをゝいゝなゞ打てを城中いるゆて
見へへゝ。こゝうる勝利かのあゝをとり。行和
を付ゝ。ゝて川ゝ。ゝうきびしくゝうゝをゆば。城
中ハゝゝうゝへゝくて。ゝさいゝんゝゝ。
ゝ。ゝて只一のりゆの川ゝゝんゝ計慶
をゝ。一門員代ゝ。ゝゝ。ハ仕寿をのゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

撰打いでゝ人用心ゆゑ[illegible]
武者三百[illegible]のき作を担裏よりかゝしあきらり。
諸手の人数は面を見付こいふ渇鴻こそ
諸手より抽でゝきこのゆゑ見へゝりとて。
諸軍勢甲冑を着しひめきがゝ
ゝゝ御旗をゆけゝ常くかゝゝき御軍法
りゝがゝゝて時をうかゝふこゝ渇鴻
こそ出へ作を担を仕る用心はゝあゝを
はゝゝ作ゝへきゝゝゝれがこそとて行きゝ鳴
を渇鴻人数出へ仕寄

を作ゝゝ見ゝゝこゝ待ゝは一撰ゝ数千
人ゝりゝゝゝ石てゝ用意はゝ家ゆゑ浜
勝敗人数をりてゝ
地ゝくめよ仕寄ゝる渇鴻多勢にて
ゝを[illegible]一撰ゝを[illegible]くうち
ゝめゝる時は渇鴻はゝ付柳原鑓弾
ゝはゝ列墨先を使者年十七歳いまゝろ
戦者は事ゆゑ御軍法をゝりきゝへ
のゝゝゝゝゝ量見ゝゝゝゝゝゝゝゝ
は者をひきゝゝゝ二はへいのよりゝ

掛潘ひさき潘さうんでゝ射さるまゝに矢前
ゝをくむがり人第とうゝひるむこゝ為
尤右馬頭と云ふ人ゝ此ゝ城一
面の柳原尤右馬頭と云ふ人ゝ名の
きこえれば親父爲弾正忠と見えゝ河軍法
といひぶゝ愚息尤右馬頭と討ゝて後
業いかゝ朝ゝ猶豫ゝ
こゝゝれば後陣より使ゝ
ゝてせんめゝ渥美ゝ
城中に一揆蜂起朝
暮に寄ひより新城へ攻寄
中に屋ゝ飢ゝ
ゝ民屋ゝ疫病のていゝ
ゝ絶ゝ
ゝ屋ゝ
れば渥美ゝ仕寄ゝ付るといふ
ゝ城ゝ
ゝ白晝
ゝ寄ゝ
ゝ柳原ゝ
ゝ城中へ

二ヒの大名ばかりをのみとらるるよりほかさうなる事を見てく諸国ヒの人々猶為よりきのりせ〜きてんがりとゆるこそハのりこゝろぐまとよ火急ヒ城寄りかまぶ總軍ヒ寄をよかりちうを常とする人ハ者〜ぶ為ぶんを

をもちこゆくこゝろのヒれかゞ内よ大名ヒさきて細川越中ぞ患利数万人ぞ軍兵ども持ヒ大名三ヒ九くじよのり破り働こゝろ為討をて突とてがう人衆ヒ事かをば頸こゝるまでよおよびぶこと是火

をもあ〜りで二ヒ九ちまよりとりかけて。りみよりでそ日あよりる猶為人数を二ヒ九二ヒきどへこゝりこゝ是をくじよ破らんとちゝみれども言利ぞ冊数千人二ヒ九二ヒきどへ打ぞくてりちゝ寄りとりをりりく。家をさいごと焼せさらればさもぐ湯為大人数押よをこゝりといへども城を戸口破をかゝくして時をうりを下ぞよ細川人数後ヒちまぞを打屋ぐ。働農ヒ者どもをとぐ〜きりをて。斬つ〜初一民屋よ多く

小夫をひやく花をちらしあるれば城中
は一揆ども勢ひをしの寄ぬ後陣より破きたに
れば前後は寄手よりあらんでとうせんは力
を尽さとそうぜんとして見へつる
ぐさてをかりてもやはりひろんあぶんかも
さうてゆげこころる細川人数もやくかん
まるへいのくへあうけひさとる一揆ものと
討とて即時に本丸へ乗入らんと仕りけ
まてども中丸はぐうん大石大木をとゆげ
ひ。乗ハ引てのけるをとるひけ。乗ハとま

ぬ。ハ夫をゆげひけ。ゆげひけ。ゆ。ゆ。ゆ

新手を入れ〳〵ゝ人を防戦はなかりしかども二十
七日は国は下郷だりおいかをおそひ
ごれたりまして手をのりてれようのがり
を入さをするぬ。比類かり〳〵働かりがゝ四
小日を暮てゞれば彼門人数八本地をおか
寄りかりく大ざくをかりまり〳〵ゝ夜を
あ夜とぞ中のへし〳〵。さてかゝめを畠右衛佐
忠之大沢は持ロはとりまけめん一ありれだ。
日暮を仕寄をとりゝ数付ゝと云事を

のゝ時前とまりゝ〳〵ゝ諸国は様子を
見付見を数万人は者ども大沢口松山あ
ま者常は風川だゝとゞ見討とゝて。
ゝ日本地を無ゝんとゝとりれども数
ハたうまとゝ暮天よおすびぬまばち
ゝゝのゝゝゝ夜は大沢は地よりへ行ゝ鶴橋
人数を上使柳原をさきくとして二地
破魔をべいとゝとりゝども二は地二は城戸地
戦まとを測かりればかの城戸口めく河を
りゝ日暮ぬまば是を本地へハ忠のり込

ぶ[illegible]れ出れよ押[illegible]
かゝる。[illegible]立花松ゝ寺沢[illegible]
原宮水野日列[illegible]
人数の色色面々の持口へかゝるさよ
[illegible]おれ[illegible]
物骨を研[illegible]
おりひをうゝ[illegible]諸[illegible]
とりぬきてをかゝめて大将[illegible]
[illegible]
[illegible]武士[illegible]

諸人眼前ありといへども今日中[illegible]
[illegible]天ハ自然[illegible]
て。天守[illegible]
まんとおりふり[illegible]
魅供せとりこのうまへ[illegible]
[illegible]
さいをいを[illegible]
潜卒をぬきんで[illegible]
[illegible]
[illegible]

きりくるゆゑ志賀島に勇士多くとさく人
見とがんじくるゆゑ翌日二十八日あきがの
ゆり備を一同よこへをあるゝ事丸を奪ん
とゝくみれども吉利与丹治丸を書か
堅固よりあり川くゝ大石大木をあげ〻く
おいて川ゝ流ゆゑ長刀をもくま
ゝりゝ事丸をあゝせどゝ奪はんゞく
戦ぬ寄手武軍勢はまゝにきうゆる城
石垣をあゝりあり面をふゝぶかぶていへ
ども事丸多勢武川ゝ上より見下し

大石大木をあげ〻ゆゑ岩蔵より火を付遣
まあらせどぬせどゝ武川が数万武寄手心猛ハ
いさあども見あぎゝく戦事あるが心力をたう
きゝ武士どもうゝきりくるゝれども西の
大沢口ゝ富忠之持口より富義作同三左衛
父子をゝきゝけゝて数万武士卒殘兵を取
駐詰ていあまばゝうちげゝく攻せくと
いべども忠之人数新手を入替〻せあれが
手負武事丸さき奪りハ富手をとゝそき
ゝへくるゝゝうちいへども事丸定郎が長孫を

三月に嚊天より細川肥後守より大矢
て仰さうてゝるかどりよりあり〳〵嵐ちげ
くて數多に斬屋かゝりみとゝもよりあけあ
が〻諸手に人數は數上よりう〳〵を為後
左右よりひさ〳〵とけりこゝ攻軍勢一回よ
勝時どりとうりをこゝひ働民に者どもをば
さうりとて法きゝて法ゝいさゝよいさん
でもあれがこうを最期に戦ゐをば老
若男女よりるまで今日をかぎりとぬせざ
れがも日来遠矢に利運よりを遂して帰り

大力合に事ゐをば強民に寄手よりを矢
〻あり〳〵者どもを名をあ〳〵り
て死をゐ〳〵みかゝゆ〳〵と討きくるゑゆく
進働に刀ゐ〳〵をのをよひせんで寄手
に面を見へられが今ハかりとやありひくゑ矢ハ
矢に中へ飛へ求ハ討死仕〳〵りくる。一揆ゑ
大将宇都宮が細川紀中を忠利に家人諸の
仮為寄とり者討とりくるとできえ〳〵。その
日廿八日に午に剣ばりよ諸ことくを亡
びくる。不思議ゐ事どもありされど

以原氏城と申ハ。ひゝうの竜城ふびく
ありといへども。やゝく落ふる例なりと。古
人ゝ合戦なる。そ一をひろさ百間
城。敵味方の骸骨山を築ふるごとし。死
なる所のうち人老若男女ハ。三万
七八千ゝあるべしとぞさゝへける。されば
あぶんハ負け死なれば。ちりて都合ハ知ざるべ
なる。数万の寄手ゝ死をかろんじ。名を重
じ。ゆうひよりれの城をりあれば。一騎ゝ
よ心と強ゝ。ゆ。ゝ。ゝ。ゝ

義政家人より。討死百廿七人。手負三百七十九人。松倉長門守嫡家家人より。討死廿七人。手負九十七人。小笠原右近大夫家人。討死廿四人。手負二百三人。同信濃守家頼の人より。討死十九人。手負廿者百四十八人。松平丹後守家人。討死三十一人。手負百廿七人。水野日向守家人より。討死百六人。手負三百八十二人。寺沢兵庫頭嫡高家人より。討死廿三人。手負三百十四人。戸田左門家人より。討死三十九人。手負三百八人。

戸田左門家人より。討死四人。手負廿者三十余人。さて松平伊豆守信綱家頼の人。討死六人。手負百余人。討死合して千百三十六人。手疵を被。士卒六千九百五十余人。都合討死手負廿士僕共八千八十六人。さてさきの軍使士諸軍人討死多くしといへども。猶もたゆまざるよし。さて忠がり人数万代者ども。一心不乱よ死をさだめ。ひきかへるもち意をよせ古めもまた代よの。類とくめき事なり

山田右衛門作方死をおで一生を得る事
今亡数万の苦利を冊の中に山田右衛門作と
云ひし者方人の死を脱れ給ふをいかとも
よ彼右衛門作を賞し人より勝れ諸学を専よ
国諸道浪々ぬ者と風聞せしかば右衛門作
城中の人の持口の人の民間ありしを右衛門作
心よりかうがうの天下を引うけかく一揆を
企す事恐天あんそかうんやと深理をあり
て偏に武多へ忠別の事を保ち盗
陽中自の法ひそかよりて忠節のなさい

寛をと上願よ遠ちとら逐ん山田右衛門作よ源
傾の者八百余人あり是迄地躰不進の苦利
与冊あり〳〵かども徳堂なるその發場よりく
押籠住る力かく〳〵撰籠ゆ出ることく〳〵武
家へ深志を奉者ども有りかうへ城寄を
急ぎ御供仕て時日を遠ず御苦文を祈
奉らば吾与勝八百人の禦由ゆて城中の諸
屋よ火をとけ吾〳〵御源へ参りべく又其
四郎ど右源へ云ゆて一まず落べき風情ま
て小船よりて寄也輙四郎を生捕て御忠節

れを一しゅく[illegible]竜城れ最もり私慮をいたる
小船少く用意仕り召置ひよし秀細矢文よ
認め有馬左兵衛佐れ持兵へ射入られ寄手
れ者ども是をとり屋ゐて御目代よ披露と伝
綱是を披見ゐて[illegible]持兵れ諸将よ會合
ゐて武田ひそうふ御ぎさうりありぐされども
武者城中第一れ民首ときこゆる[illegible]心うる
ぐ〜く思召定てがう人多餘餡のせあよ定
しよ偽の行ゐるべしとて文よ御許
用かりくる山田黙止がくありひ重ゐ民部大

濃志れ意趣を諸社れ牛王を裏反傍南面
州れ誓言を書記してひそかよ文挿ぶ
よへハ何ら偽あんと城内れ時節を御さぶ
ゐてひそかおかをぐよ召延を矢文よ射さ
せ〜かされば城中のまぐ中時れ運や法よかり
ゐん山田ハ是を知ぐ〜ぶ〜て析節夜廻れ奴原
拾ひとり宮郎よかと告よゐる時身大きに
をどろきて〜かまて〜ハ一向れ吉利与冊と
ありひ〜よかるべしとい知〜ぐりきたのひ
おれりくよ面りゐんとをあ不よ天帝れ冥助

ありがたくとてやがて右馬佐かくめとりかまて
ゞ書み一族等をとゞくこと場よりおいて殺害
し山田いるのゞ図べきこの細みこきびくいま
め勝おけとて大江は諸籠よりびうをを入まて
ゐをとさめをて宮部城中はくは民部をとり
付武矢文は躰近日民部より意付をを活か
つを持ゐとゐうよしゝ中ゝ大事ゐうべゝゆ
ゞんゐく鑿図をべゝとて宮鬼掃部人よい
ゝき奉行を指副て三百よ人ひまゐく城中を
まゝとゝを持ゐ心強はゐきこうよ用心をとゞで

きこへくるおゝつゝ西よ城中よりも永海よ撃
書蓋人ゆくゐよりゐ御門員代かの蓋人を
中ゝよこざうゝき者をゐ城中は事を
御為ありくるゐ活くむよゐゞるこのまくに
吐合をとゐ城中は自ハゐぶん撃薪書て
弘前ゝへ山田をとゞをて又當右馬作とゝ
者ありやと御為ありくれゞをんゆかれゐ丸
持ゐはゝらゐ人は間をて人数八百よ人は
大將佳る者ゆくゆゞ是ハ寄多へ心勢りは由
ゐゝられゝ山田ゞ一門をゞゝ南時の殺害也

ら右馬作と誅もべきの由よ宣ゆへども時
奥図べきの細ことして餘儀なく大沢は竜舎
と兼ゆくとと使ものゝ〳〵やメ爾さそこを
かまこハ主の実味方恵列は若ものゝ〳〵あれ助
命ゝそ為るべく〳〵なれどもきそはみ打
遊ひ〳〵ふ山田ゞ運やはようりゝ日数なくの
不思議よ落城急とあり二月廿八日ゝ生捕の
一揆は中よりゝ〳〵びうせゞ〳〵ゝれ
ゝゝ御目代御帰んじて右馬作よ事はやうを
御尋ありゝるおさきは落人はゝ〳〵ゝとこ

ゝもたゞゝ山田ゞゝる條〳〵ゝ知きこへ
ゝれゞ右馬作一人をバ天下ゝ恵ありゝれ
ゞ助命は言ゝいゝさんとして助て江戸へ召供せ
ら是ゝ彼ゝく宮ゝそは是ゝゝ為ゝ宮ゝ
一揆は運は中ゝ天命は恵ゝ山田一人虎
口よ宮ゝとはゞれゝる人身はなどこそ不思議
ゝ

一寄手は人数帰陣之事

付 松倉兄弟流刑之事

去程よ有馬は城ゝゝゝく崩破平物

みてそこに原くまのありかくる鄰て寄るの此諸、
軍勝の事を外月始めから西へ歸陣ふ。
されども御自代信綱氏鍵の直りのまま帝長
濤邊へ打通ひ御信盡等歸行それより
肥前に名古屋かゝり邊へ遣き給ひ鍋前
城下福岡の庄を打通め鍋島茂賀頃
ゝ豊前の小倉に着給ふかゝり
所の御ゝ所ゝ又大田備中守等談
を為て是を豊に小倉より著給ふ忘るる
九州に諸將を豊州小倉より召寄せて。

上意をこそ作りこそ意趣の今の義濤
原のまま帝南西に一揆の都て所守に政法
輕弱なるゆへ必ずば行き色死刑に行きん
汚名ども懈怠を加へらるる所に小倉長門を
義作に流罪せ〳〵殺害肉に弼で預らる
こゝ金子に小倉右近を壹濤へ流罪
壹濤へ弼で預らる湊より寺沢兵庫を罪科ゝ
きよあ〳〵に流罪を然詳ありてあま帝に
五石を召上て櫛原飛彈守父子濤に
濃守あ人を御軍法をそ魏しる科

が俗くの御ふそくんと為りしゝども御敵
免とゞきこえ入るされば君は御いさゝかも
御慈悲善ひろきこと浅からぬ史記は詞
よとゞまることを誅せざる則恩をおそれどといえ云
ども罪はうとがひとこれかろんぜられ今は松倉君
寺沢は免罪をゆるあるゝまゝ軽重は法にまかせ
源刑或は禁錮はありひとあるありゝごとく
事どもありからば御御敗はよいよ〳〵海
内志げかりて土農工商よりるまで恩
いよいよ俗せ〳〵幸法こへきく延喜天暦

は聖代なれとこれよりはもとゞまりとゞまるへし

鴻原記巻下

慶安己丑年七月中旬

八木氏